



## 南大阪の文化基盤：地域文化の形成と展開

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山中, 浩之 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/10387">http://hdl.handle.net/10466/10387</a>

## はじめに

歴史は、人々の地域意識において高い比重を占める。地域はもととあつたものではなく、何よりも人々が歴史の中で形成し変容してきたものだからである。地域は自然環境、気候風土だけではなく、人々が生活習俗、生活様式、言葉などを共有しながら、経済的営みや支配関係において一定の共通性を意識するなかで形成されてきた独自の地理的空間といえるからである。時代や階層によつても地域のとらえ方は異なるし、もちろん支配者の行政的な区分とは必ずしも一致しない。ある時代に、多数の人々によつて共通性が意識され、それを通して一体感を形成してきた地理的範囲が地域であるともいえよう。そしてそこで共通と意識されている独自の生活の在り方全体をさして地域文化と呼んでもよいであろう。地域には大小様々なレベルが考えられる。小さな地域がそれぞれ独自の独自性を確保しながら、社会的諸状況に応じて相互に結びつき、より大きな地域を作り出していく。そしてそこに新しい異質な文化が流入してくるとき、一定の摩擦や変容が引き起こされる。地域はそのとき、一方では「統合」と「差異」をきわだたせながら、他方交流を通して地域独自の受容がなされ、新たな文化をそこに作りだし、またそのことによつて地域の新たな展開がもたらされる。その意味で文化は地域意識形成と密接に関わっている。本書ではそのような動きの一端を南大阪の歴史文化においてみることにしたい。

さて、南大阪は大きくいって泉州（和泉）と南河内からなる。泉州は現在は堺市・高石市・忠岡町・泉大津市・貝塚市・岸和田市・和泉市・泉佐野市・阪南市・泉南市・熊取町・田尻町・岬町からなり、南河内は松原市・藤井寺市・羽曳野市・富田林市・河内長野市・大阪狭山市・柏原市・河南町・太子町・千早赤坂村からなる。明治二二年（一八九九）の市町村制施行以前においては泉州は大鳥郡・和泉郡・南郡・日根郡に分かれ、南河内は錦部郡・石川郡・古市郡・安宿郡・志紀郡・丹北郡・丹南郡・八上郡からなつていた（別掲図参照）。現在とは地域区分が異なり、より広域な地域構成になつていたが、またこの区分は行政支配の区分でもなかつた。

むしろ人々にとっては個々の村や町に所属していることが大事でその村や町が幕府をはじめとするそれぞれの領主支配の下におかれ、そして、同じ支配に属する地域同士の結びつきが強く、郡を越えての村や町同士の結びつきは比較的自由であったのである。現在のように行政区画が地域への所属意識に強く作用するようなあり方は、歴史的には、そう古いことではない。このことも当時の人々の結びつきを考える上で注意しておくべきことであろう。

これらの地域がはやくから開けた地域であったことはよく知られている。しかしこれらの地域がそこに住む人々によって、個々の村や町を越えた全体としてある共通性をもつ地域として独自に意識されてくるのはいつ頃からであろうか。地誌の成立が一つの手がかりになろう。河内で三田浄久（さんだじょうきゆう）による最初の地誌『河内鑑名所記』（かわちかがみしよき）が著されたのは延宝七年（一六七九）であり、泉州で石橋直之によって最初の地誌『泉州志』が著されたのは元禄一三年（一七〇〇）であった。おそらくこの時期には地域が一国規模の範囲である共通性をもって意識されるに至っていたのである。この意識の背景にあるのは畿内先進農村における農民的商品生産の高度な展開であったと考えられる。綿・菜種・たばこ・酒などに代表される商業的農業の発展である。綿織、油絞等の農村加工業が展開し、農民の商品生産者への転化、富農経営を現出しつつあった。そうしてそれを通して農民的商品流通とその市場が形成されていった。村々が商品生産と流通によって結びあわされていく動きである。一七世紀後半には村と村、村と町の間で、農民的商品を媒介する在郷町（ざいこうまち）が大阪周辺にはいくつも成立していった。大阪・堺を中心としながらも、その周辺に在郷町を核とする流通のネットワークが形成されていったのである。村や町の人々が個別の支配をこえたつながりをもつ、経済的な条件がつくりだされたのである。村や町が支配領域を超えたつながりをつくりだしたことは広域的な地域意識を形成する現実的基盤であったといえよう。このような動向が人々に文字能力・計算能力を早く広く普及させるものとなったことも文化史的には見逃せない。

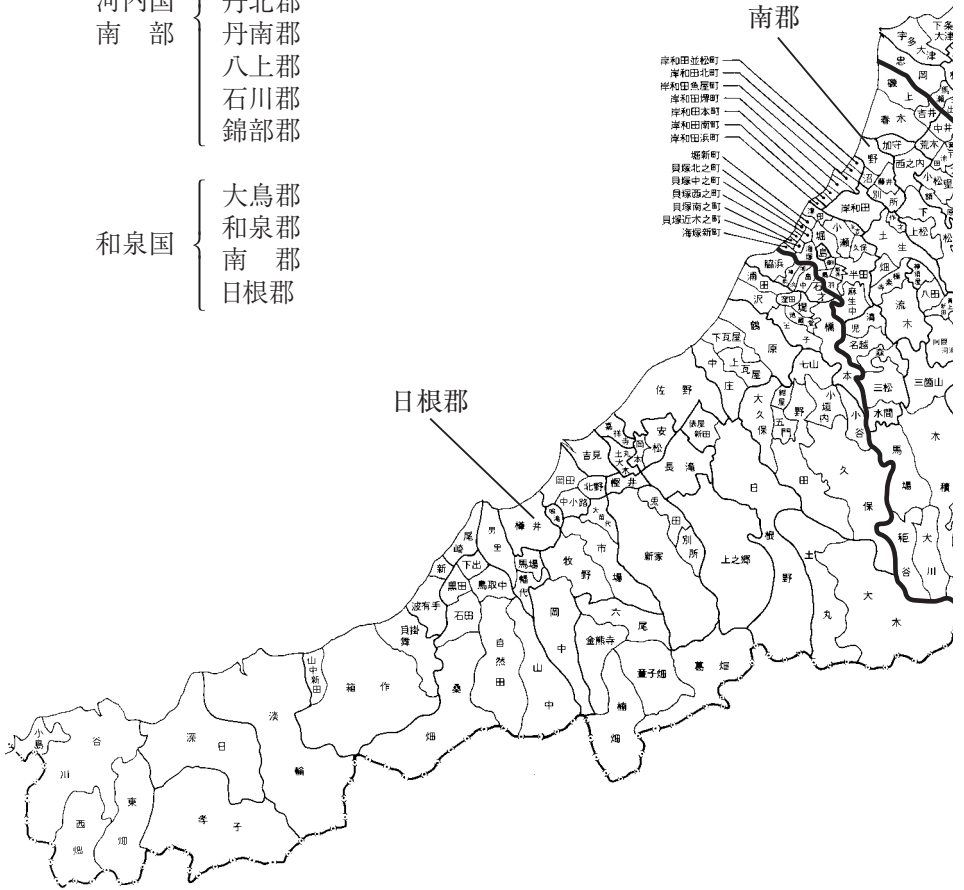
もうひとつこの地域で注意されることは支配の在り方にかかわる。どういふことかというところ、たしかに岸和田

藩というのがやや大きな藩としてあるが、そのほかには一万石程度の小藩が三、四ある程度で、他は大半幕府領で構成され、入り組んだ複雑な所領配置になっている。住んでいるもののほとんどは身分的に農民である。そのことは文化的に見てならマイナスの条件になるものではなく、逆に大きな藩の支配力によって地域が丸ごと支配されにくい地域でもあるという性格をもつ。領主支配が散在的脆弱で、支配の力が浸透しにくい地域という面をもっている。このような地域では領域を越えた形での町や村の交流がなされやすく、支配者は庶民の文化的な活動に対して規制をおよぼしにくい。このような支配構造というものがこの地域の人々の文化的な活動を形成しやすい条件を形造っていたのではないかと思われる。このような社会的条件のなかで、どのような文化が、どのような意味で受容され、地域文化として展開したのか、その一端を見ていきたいと思う。



近世南大阪の郡村図 (『大阪百年史』付図をもとに作成)

- 河内国南部
  - 安宿部郡
  - 志紀郡
  - 古市郡
  - 丹北郡
  - 丹南郡
  - 八上郡
  - 石川郡
  - 錦部郡
- 和泉国
  - 大鳥郡
  - 和泉郡
  - 南郡
  - 日根郡



# 南大阪の文化基盤

## － 地域文化の形成と展開 －

山中 浩之

---

はじめに	1
<hr/>	
一 在郷町と文化受容	9
<hr/>	
1 河内屋可正の「芸」と教養	
2 能の盛行と地域の生活	
3 前句付俳諧の創始と普及	
<hr/>	
二 学芸拠点としての大阪とその交流	31
<hr/>	
1 学問を求める町人たち	
2 混沌社と学芸社会の成立	
<hr/>	
三 在村知識人の形成と交流	43
<hr/>	
1 遊学者と地域社会	
2 竹島浩庵と華岡流医学の普及	
3 在村知識人の結合	
4 白鷗吟社の結成	
5 柘植葛城と立教館と	

# 一 在郷町と文化受容

## 1 河内屋可正の「芸」と教養

**地域文化と在郷町** 南大阪の地域文化の交流と創出を考えていこうとするとき、とくにこの地域においては在郷町に視点を置いてみていくことが有効であろう。在郷町とは、農村でつくりだされた商品作物や、農民が必要とする商品を取り扱うところとして農村地帯に形成された町場である。在郷町は商品を生み出す都市と、その商品のもととなる作物をつくりだす農村を結びつける機能を持っていた。在郷町に対する研究の関心は、都市と農村を分離することで成り立っている幕藩制の経済制度が、在郷町が成立することでのどのように変容していくのかという点にあった。特に畿内の在郷町は他の地域に比べてはやくから発展したが、大坂が全国の商品を取引する市場となつていくこととどのように関係し、どのような生産と流通の仕組みを形成していったかということにも注目されてきた。

しかし、そこに住む人々にとっては経済上の機能がすべてではなく、そこは生活を営む場でもあった。特に在郷町は都市と農村の経済を結ぶ役割を担っていたことにより、都市の文化を受容摂取する起点であり、また農村の文化と豊かに結びついていた場でもあり、文化が新たに融合して形成される場所であったといえる。文化といえは都市文化のみがとりあげられがちだが、庶民の文化を考へる場合には農村の文化にも目を向ける必要がある。

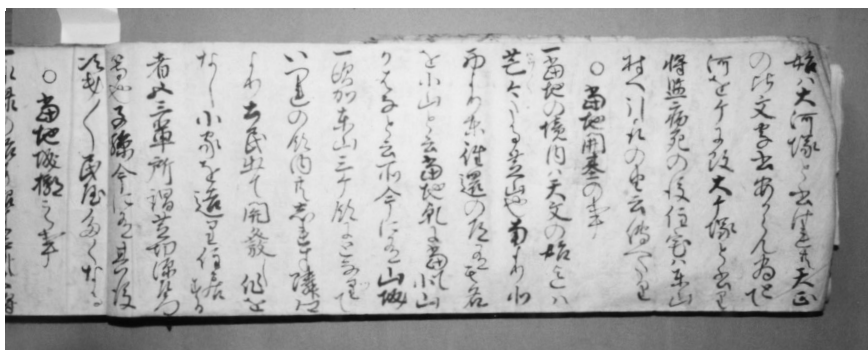
**大坂周辺の在郷町** 特に大坂周辺には成立事情はそれぞれ異なるが、多くの在郷町が早くから成立した。池田・伊丹・富田・吹田・茨木・枚方・守口・八尾・久宝寺・平野・柏原・国分・古市・大ヶ塚・富田林・貝塚・泉佐野などである。地域も広く全体を概観することは困難であり、また概観するよりも一定の地域についてより深く文化の諸様相をみるほうがわかりやすい。それですま大阪南部に位置する大ヶ塚・富田林を中心に見ていこう。



大坂の南北に長く広がる河内国を縦断して、京都から紀州高野山を結ぶ東高野街道が通っている。その南部、石川の流れと平行して通る地域に富田林、大ヶ塚の在郷町があった。両者とも一六世紀後半に寺内町として建設されたところ、その後近世に入って町場として発展した。大ヶ塚は南北五町で構成され、すでに慶長年間には毎日市が開かれていた。貝原益軒はその『南遊紀行』に「民屋五百廿軒」と記しているが、元禄一六（一七〇三）年には戸数三八〇軒、人口一四一五人であった。

『河内屋可正旧記』 その大ヶ塚で酒屋・油屋を営み、かたわら田畑を多く所持した河内屋五兵衛可正（壺井五兵衛、一六三六―一七一三）が元禄期に書き残した記録に『河内屋可正旧記』がある。『河内屋可正旧記』はその可正がこの地域で生活してきた間、見聞きし経験してきたさまざまな事象を教戒の意をこめて地域の人々や子孫に向けて書き残した記録で、元禄期庶民の生活と意識について豊かな知見を与えてくれる。

寛文期（一六六〇年代）ころからこの地域に煎茶やそば切りが普及し始めたこと、たばこもかつては「長命草講」という講をつくって月に一、二度のみあいい、ときには「目をまわして絶死する事」もあったが、「このころは五歳七歳まで用いるやう」になってきたこと、なかでも飲酒の増加は著しく、「ひた呑みに呑み」て家をつぶすもの、酒のために女房を「ほしごろし」にして自身は生き埋めにされてしまったものことなど、元禄期に顕著になってきた生活風俗上の変化も興味深く語られている。



『河内屋可正旧記』自筆

そのような変化をこの地へもたらしたものはやはり在郷町としての経済活動であった。この地域は近隣の富田林とともに必ずしも大坂の間屋組織に組み込まれずに、独自に江戸、長崎、熊野、北国地方などと直接の遠隔地取引を行っていた地域であった。しかし可正は当時のこの地にはふさわしくないものと見るようになっていた。「ことに遠国他国の商ひ、なおもつて当地に不相応也」とのべ、「北国おもての商ひ」や「長崎うらの商売」を多くの人々が行ったが、結局大損し首尾あしくやめざるを得なかった。それらを見てきた可正は遠隔地商業を否定するとともに、住人が商業活動に中心をおこうとする在り方にも反対した。投資リスクが大きく、家の破綻を招きかねないからである。

可正は「当地に住むものは商ひばかりにても、その家はと、とのひがたからん、また耕作のみにてもさかふる事さのみあらじ」といい、「商売と耕作とを車の両輪の如くにすべし」（巻一二）というのである。「たとへば拾貫目ほどの進退ならば、五貫目は田畑にすべし、壹貫目は箱に入れ置くべし、残り四貫目にて商ひすべし」（巻一六）と述べている。このような経営バランスに身をおくことを在郷町における家産の維持安定の原則とした可正は、だからといって文化的諸活動を否定するわけではない。むしろ経営と文化的諸活動の関係について注目される意見を述べている。

可正の「芸」 『可正旧記』の一節に「芸能を仕習ふべき事」というのがある。その最初に可正はこう述べている。

「進退の事をわすれず思ふ者は、いとま有るとき、慰に芸能をするとも、心得の有るべき事なり、我が身の上、若<sup>も</sup>し若<sup>も</sup>の衰へをすくふべき芸能を仕習ふべき事なり」と。ここでいう「進退」とは身代すなわち家業家産の維持運営というほどの意味である。つまり家業の維持に心くたくほどのものは、自分の生活と身心の衰えを救うような「芸」を習えというのである。

それでは彼がすすめようとしている「芸」とはどのようなものであろうか。「手かく事（字を書くこと）、男の第

一の芸也」と可正はいう。いくら立派に見える人でも、「進退のよき者もあしき者も、渡世の暇あらば随分手習すべし」と、これが可正のまず第一に強調する「芸」であつた。おそらくそのことは、字を書くことが「芸」とよばれるほど、まだ人々に共有の技術となつていないことを反映してしよう。

この手習いとならんで可正が強調するのは、「算用」である。「算用」は商人にだけ有用なのではない。「士農工商とも知らでかなはざる物」である。これを知らないものは、「心の落着なりがたく」「所帯方にうとかるべし」という。「算用」によつてえられる「心の落着」とは、生活や経営を収支計算によつて計画化することで得られる心の安定である。在郷町大ヶ塚に住むものたちにとつてふさわしい経営のあり方を「商ひと耕作を車の両輪の如く」に営むことにあると可正はみていたが、そのような経営において、「手を書くこと」と「算用」とは、何よりも必須の「芸」とされねばならなかつた。可正の用いる「芸」という言葉には、生活の実現に必要な諸技術というほどの意味がこもつている。

しかし、それらの「芸」を身につけても、なお「進退という物は定めがたき物」だと可正はいう。可正の経験によれば、「たとひまつたう（誠実に）家業をつとめ、万につ、しみ深く世をわたる者にても」「一度は榮へ、一度はおとろふる」とみざるをえないものであつた。彼は『旧記』のなかで、地域住民の没落盛衰のありさまをこまかに記しているが、彼が見聞きしたうちでも、「悪敷成行者」（二人）が「宜敷者」（五人）よりはるかに多かつたのである。

「芸」の必要性　　そういう在郷町商農という不安定きわまりない「進退」の営みに身をおきながら、可正はなおかつ「芸」の必要性を強調する。いやむしろそうであるからこそかえつて強調されねばならなかつたともいえる。それでは彼は、「手習い」「算用」という基礎のうえに、さらにどのような「芸」を身につけるべきだとしたのか。その「芸」選択の前提には、まず次のような意識があつたことに注意しておかなければならない。

世は太平也。身は百姓也。武芸をなせば心自から勇がちに<sup>いさみ</sup>なりて、事をこのむ氣生ずる物也。惣て益なし。習

## ふことなかれ（巻六）

世は平和な時代であるという意識、そしてそのなかで「百姓」であるという身分意識が「芸」選択の基準として示されている。しかしそれは単に消極的な意味あいでの分限意識ではない。「身は百姓也」という強い自己限定は、逆に限定する内容についての強い自信を語っているともいえる。元禄期在郷町の経済変動を経験しながら、「百姓」身分として生きてきたこと、そして生きつづけねばならないことへの自信と意志とをひそめてみるとみられるのである。

たとえば「自害者」というものについて、可正は次のように述べる。

「一命を捨ると云う事は成がたき物ぞかし。武家の衆中・上臈じょうろう（高級女官）の儀はいさしらず。爰元こどもとの賤敷輩いやしきやからは、恥辱を思ひ貧苦うれいを愁うれて死する者一人も有べからじ」（巻六）と。

可正は「自害」を絶対的に否定し、「狂乱」といいきる。しかしなぜ、「爰元の賤敷輩」においてとくにそういわなければならぬのか。可正はつづけて武士の「忠死」ということに関連して次のようにいう。

武士の家には主君の為に一命を捨る、是を忠死と云へり。士卒（家来）の為に命をなげうつ。是を仁死といへり。義を重んじて一命をかるんずる事、武士の至極とする所也。（中略）況爰元いわんやの賤下々いやしきしもしも、仁も忠も義と云も、其名もしらぬ者共、狂乱にあらずば争いかでか死せん。自害したる者共を、かりにもほむる事なかれ、手を打てあざけるにはしかじ（巻六）

「死」というものに何らかの価値をおき、そこに一つの救いを見出そうとする武士的意識に対し、それには無知無縁であるべきはずの庶民のなかで、それをまねるかのような「自害」の形をとったものを「手を打てあざけるにはしかじ」とつよく突き放すのである。「自害」の理由が「恥辱」や「貧苦」であればなおさらのこと、なぜそれが「賤しき下々」にとつて死の理由になろうか、というのである。「恥辱」や「貧苦」はむしろわれわれの生活そのものであって、それをことさらに意識するところに、「分限」をこえた思い上がりと言えをみているともいえよう。自害

者への同情を自己抑制し「狂乱者」と言い切るその姿勢は、庶民の生活には没落盛衰が不定であり、しかしだからこそまた転化上昇の可能性もあるのであって、武士のごとく「恥辱」や「貧苦」をことさら意識することなく、そのようなものとして生活を現実にしつづける以外ありえず、そのこと自体に価値をおこうとするのである。

可正が武士的なものへの憧れをもたなかったというのではない。彼は一五、六歳のころ武芸を習おうとした。しかし彼はそれを断念したのである。状況を認識して自分を限定する厳しさと、その限定された枠において自分を生かそうとする在り方のなかに可正の「芸」への接近のしかたがあった。

## 2 能の盛行と地域的生活

可正と能謡 それでは「百姓」としてのそういうバランス感覚をもつともよく充実しうる「芸」とは何であったのか。彼においてまずそれは能謡なのであった。なぜ能謡なのだろうか。能謡曲は古典文学を豊かにふまえ、伝統的な言葉や知識を錦織のようにつづった詞章をもち、その謡と仕舞は同時に身体的訓練の意味をもちうるものであった。しかし可正にとっては、そういうものとしてあるだけではなかつた。

可正はあるとき人から、あなたという人は分別顔して人々を教え諭そうとするにもかかわらず、なぜ能を好み金銀を費やすのかと、とがめられたことがある。「可正能に教寄し事」。彼はそれに対し、「一言返答成り難し、皆我あやまりなるべし」としながらも、能をすることの五つの徳について述べている。一は、先祖代々愛好した芸で、それをつづけるのも孝の一つで断絶させるのは無念であること、二は、能によって、「稚き時の行儀自ら能くなる事」、三は、能はもともと古代中国で孔子が音楽を正したことに基いており、「昔の楽、今の能」であって、つまるところ「悪を恐れ善に進むの業」であること、四は、能にはたしかに費用がいるが、好きな芸に集中することで、かえってほかの驕りをやめ、始末がよくなること、五は、能はいつでもやめることができ、しかもその「徳」は生きつづけ

ること、以上の五つである。いささか自分の好む芸を正当化するためのこじつけと思える部分もある。それは可正自身がやむにやまれぬほど能が好きであったことを語るものであるが、同時に、自己限定の枠内で教養文化志向をもつとも充足することができ、しかも生活と遊離しない「芸」として能を考えていたことを語る。

「芸は身を助くる」 さらに可正においては、能はそういう自己満足にとどまる芸とだけみられていたのではなかった。可正は「謡は上下押なべてならふべし」と、誰もが習得すべき価値あるものとしてすすめる。それは習うだけのものではない。「寝ながらも、行ながらも、家業をなしながらも、昼夜を分たず、うたふ」ものと、「芸」という意識をこえて、生活そのものと一体になった在り方を求めようとする。「芸」とは、生活の遂行に必要な諸技術を意味した。「芸は身を助くると古人の云れたりしは尤也」と可正がいうように、能芸は「進退」の不安定さをささえるものとしてみられるのである。すなわち

兎に角進退と云物は定がたき物也。其の時、手を書き、謡にも習ひ置たる者は、手習の師匠となりて、肴謡さかなうたひ（宴席での謡）の小謡こごうたいにても教へなんどすれば、何所どこにても、五、三人程の渡世は、成やすき物ぞかし。町人商家の奉公をするとても、手を書き、算用を達者にすれば、給銀も取やすく、其の上にて四書（大学・中庸・論語・孟子）のそよみ（素読）にてもする程の者は、主人もあしく思はず。次第々々に目を懸て、後には昔の進退におとらぬ世を渡る例も有也

と、可正は「進退」を失いながらも、謡を習得して字や語句を知っていたことで、現実じつじに手習師匠となり、無事に渡世しているものたちの例をいくつかあげている。たとえば、つぎのようである。

春日屋久左衛門「万不仕合よろこばにて、進退次第々々悪く成、後には散々の躰ていに衰へ、何共成り兼候ゆえ、手習子供を取り、人々に謡を教へなんどして、渡世のよすがとせり」

内堀太郎右衛門「病人の子供多きゆえ、進退衰へて身をしりぞく、謡を大かたにうたひし故に、謡の弟子を取りて渡世のよすがとせり」



内堀小右衛門「小右衛門同断、今に手習の師匠と成て渡世する」(以上、巻四)

可正における「芸」意識は、一方で、庶民の自己限定の枠内において、文化的充実を求め、伝統的教養を最も効果的に修得しうる「芸」として能を選ばせるとともに、他方、それは家産維持の不安定さにかかわって、渡世の業にも転化しうる「身をたすくる芸」として能を習得させていたのである。おそらくこの地における能謡曲の盛行は、在郷町商業の発展に伴う文化的欲求を当初の背景としながらも、しだいに身分と生活のあいだにあつて緊張をふくんだ「芸」として歴史的展開をみたと考えられる。可正が「当地に住し者共、昔より今に至るまで、或は拍子方、或は地謡ぢうたい、ツレ・ワキ・大夫ツレ、面々にたしなまざるはなし。別して謡は衆人足はげめり」と記すように、地域住民のあいだに広く受容展開されるものとなったのも、一部の上層階層の自己満足ではなく、このような意識を前提にしていたからであるといえよう。

**能の興行** そういふ住人たちを基盤にして能興行や謡の会が多くもたれた。可正らは大ヶ塚御堂みんどう(善念寺、現在は顕証寺)や自宅を中心に、富田林・誉田八幡・八尾・久宝寺・堺・大坂・淀など、しばしばその周辺都市に向向いて能役者とともに演じた。

もともとこの地の能は、鼻声のため「鼻金剛」とよばれた金剛太夫右京という人によって始められたので、金剛流が主流であった。その後、可正は孫の小三郎をシテの能役者として育てようとして、自分の養子とし、南都の能役者榊原二郎太夫や酒殿権右衛門の指導を受けさせた。そして小三郎は金剛流家元より翁伝授おんでんじゆをも受け、役者として活動するまでに至る。ただし、可正自身はその父にならって福王流を学び、つねにワキをつとめた。その可正たちの能芸は、大坂新地や淀藩主の前でも演じて拝領品をもらっているように、一農村の旦那芸というようなものではなく、一流に伍してゆけるだけの技量を有するものだった。可正は堺戎島で、能役者とともに演じたとき、彼独自の演技を主張して役者たちを困らせているほどである。それは役者たちが家元によって束縛されているのに対し、可正らは、地域独自の自由な演技を培っていたということでもある。可正らにとって能は単なる遊びではなく、在

郷町の生活者としての厳しい意識に媒介された「芸」であった。しかもこれは庶民の能受容の在り方としていわゆる謡文化ではない。まさに能そのものを演ずることに中心があったことは大変注目されることである。その意味で能は大ヶ塚という地域の持続と発展を象徴する芸となつていったのである。

在郷町富田林と杉山家「万留帳」 ところで『可正旧記』の能関係記事のなかには、大ヶ塚以外に、杉山八右衛門門をはじめとする富田林の能愛好者の存在がみられる。富田林は大ヶ塚とは一里も隔てぬ在郷町であった。

富田林もそのはじめは、永祿元（一五五八）年ころ、当時の領主安見美作守より京興正寺証秀上人が錢一〇〇貫文で買いつつた荒芝地に新たに建設された寺内町であった。南北二丁四五間、東西三丁あまりという狭い範囲に、周囲に土居をめぐらし、町割は碁盤目状に立町七筋、横町六筋で構成され、中央に興正寺別院（御坊）が位置するという典型的な寺内町の構造を示していた。当初から町場の性格をもち、文祿・慶長期から多くの商職人の存在がみられ、寛永二一（一六四四）年には職種一六、商職人軒数一八軒を数える。寛文期ころから経済活動はより活発になったよう、寛文八（一六六八）年には五一職種、一四九の商職軒数がみられ、元祿六（一六九三）年にも三五種、一二五軒が数えられる。職種のみならず、職種のなかではぬのや・もめんや・たるや・米や・かぢやなど、木綿・酒造に関係する業者が多く、なかには、紀州・江州・江戸・長崎・越前・信州などへの遠隔地取引を行う者もいた。このような町場であったため、村の扱いを受けはしたが、屋敷地ばかりで田地はなく、狭い町内に家屋・人口が密集したところであった。元祿一六（一七〇三）年には、戸数二五二軒、人口一七二一人であった。

この富田林にも、「地謡は富田林衆十人ばかり」と『可正旧記』に記されるように、元祿期には一定の能愛好者がいた。この地の能とその愛好者の内容をみるために、富田林の酒造家兼地主であった杉山家の記録『万留帳』をみてみよう。『万留帳』は元祿期から宝暦期の約五〇年間にわたって、家政・家業・村政を中心に、家族の体重調べから会所算用・所司代更迭・西国米値段などにいたるまで、まさにその表題どおり、さまざまな覚書が書きつがれているものであるが、そのなかに能謡曲を中心とした文化芸能記事が散見する。



その関係記事は宝永六（一七〇九）年から寛保三（一七四三）年までのあいだみることができ、そのほとんどは能興行記事であるが、なかに『太平記』『難波戦記』の講釈師藤三周なるものがきたこと、『甲陽軍鑑』の買入れ、揚弓場の設備をつくって弓矢を買い入れたこと、また富田林村会所で座敷浄瑠璃興行が行われたことなど、断片的ではあるが、その他の芸能についてもふれている。

能興行記事は計二二回記されており、富田林においても御坊や杉山家を中心にしてしばしば興行がもたれ、また大坂・堺・貝塚・南都・古市・当麻などへも出向いており、多くの交流をもっていたことが知られる。やはり南都との交流が深かったようである。酒殿権右衛門という能役者がしばしば来訪して、富田村衆に稽古をつけたり興行を催している。また薩摩藩の抱え役者中西長右衛門とも関係をもっていたようである。

**能仲間と商業仲間** さてこの富田林における能愛好者はどのような人々だったのだろうか。『万留帳』の関係記事にはその参加者がこまかく記載されている。それらをみていくと、富田林在住者とみられる人々は約七〇名である。そしてそこには家名を同じくするものが多くみえる。同一家名に属するものには分家・別家をふくむであろうが、いま一応、同族に属するものとしてみてみると、九家のもので計四三名を数え、七〇名のうち約六割が、これら九家のもので占められているのである。すなわちこれらの家々が富田林の能愛好者の中心をなしていたとみられる。

それではこれはどのような人々であったのだろうか。まず注目されるのは、これらのうち、河村・杉山・倉内・竹田・仲村・万保の六家は、享保七（一七二二）年正月、酒の販売協定を行うために結ばれた酒造仲間である。「**恵美須講**」<sup>えびすこう</sup>六家に属する家であることである。すなわちその六家とは杉山四郎右衛門・倉内（布屋）甚左衛門・竹田（竹屋）八兵衛・河村（布屋）助左衛門・仲村（佐渡屋）甚右衛門・万保（水分屋）六郎兵衛である。この恵美須講は、元禄期の酒造運上銀賦課および酒造制限令が、宝永六（一七〇九）年、將軍綱吉の死とともに運上銀が廃止され、制限も緩和されて、酒造業が拡大してきたのに対応して結成されたものであった。すなわち競争激化を抑

制して酒の販路協定を行い、その違反者の制裁規定を定めるものであった。

このうち、杉山家と倉内家はいわゆる「富田林開基八人衆」といわれる家であり、村役人層に属する家でもあった。また仲村家（佐渡屋）はそれまで何を業としていたのかははっきりしないが、正徳五（一七一五）年にはじめて酒造業に着手し、その後、近世後期には、河内最大の酒造家へと急速に発展してゆく家である。恵美須講以外の家では、黒山屋（田守家）三郎兵衛は代々の木綿商であり、貞享期にはすでに江州地方へ取引に向いている。そして宝永元（一七〇四）年の大和川付替によつて新たに開かれた綿作地帯と、それによる木綿業の拡大に対応して、宝永七（一七一〇）年、富田林木綿問屋仲間三軒が設置されたときの一人であった。その他、永田家は明細帳その他から代々富田林の医師としてつづいた家であることが知られ、同時に村の知識文化人としての立場にあったものと思われる。

このように富田林の能謡の展開は、杉山家の能関係記事が宝永六年からみられるように、酒造業の統制緩和による営業拡大と、宝永七年の木綿問屋結成にみられる木綿業のあらたな進展を背景とし、経済的上昇に文化的充足を加える意義をもつて、上層の人々を中心に受容されていったのであろう。そしてその能謡の仲間が同時に酒造家仲間、木綿屋仲間であったように、「芸」を通して商業仲間の結束を強化する意義をもちえたと思われる。この宝永末年以降における富田林の能謡曲の盛行は、その前段階の可正の記述にくらべて、同じく渡世の業に関連しながらも、渡世の業そのものに転化しうるものとして目的価値をもつものから、渡世仲間の結束維持をはかる手段的な価値へと、微妙ながらその変質を感じさせるものがある。そこには都市町人にみられるような付合芸、仲間芸への転化が感じられるのである。そして商業と芸能に共通する仲間の形成は、芸の特定階層への定着・固定化の可能性を含んでいる。

### 3 前句付俳諧の創始と普及まえくづけ

可正と寛文期俳諧 大ヶ塚や富田林の人々が愛好した「芸」は能謡曲だけではなかった。南河内地域において能謡とならんで最も盛んであった「芸」は、俳諧であった。この地の俳諧のことについても『河内屋可正旧記』のなかの「可正俳諧の事」にまずよらねばならない。その記述によれば、可正が俳諧をはじめたのは慶安のはじめ（一六四八年ころ）年貢収納のためにやってきた代官の手代衆に習って面白いと思ったのがきっかけだった。それが南河内地域における俳諧のはじまりとなったという。それから彼は、壺井村唯正や柏原村の三田浄久さんだしじゆうきゅうなどといっしょに、大坂天満の空存、堺の成之などにも対面し、さらに談林派俳諧の指導者で井原西鶴らの師であった西山宗因はじめ、梶山保友、玖也などとも、会席で句を練りあい、なお奥義をきわめたいと思つて、京都の安原貞室の門弟とまでなつた。太子村の重次、春日村の定久、山田村の正勝、そして大ヶ塚の正慶、可高、可之、一夢などは、みな可正がすすめて俳諧に誘い入れた。そのほかには延宝年間（一六七三〜八〇）までは、俳諧する者は一人もなかったという。

表2 『貝殻集』河内住入集者

大ヶ塚	山田	2—3
可正	壺井	3—40
可之一	通法寺	1—1
可一鳥	大黒	1—1
可一鳥	大上	2—4
可一壽	三日市	2—2
可一夢	誉田	1—2
可一宗	国分	1—1
可正	今津	1—2
可三	古野	1—1
可樵	上原	2—7
可善	河堂	2—6
計	大塚	1—1
11人—134句	丹南	1—7
板持	小川	1—4
白木	小金	3—12
春日	万代	2—8

表1 『貝殻集』入集者分布

	入集者	入句者
山	12人	31句
大	37	260
河	42	251
和	137	1156
泉(堺)	61	245
大	6	9
武	4	5
出	1	6
播	1	1
伊	4	4
紀	7	21
高	8	20
阿	1	2
安	8	11
豊	8	11
筑	6	17
肥前(長崎)		6
作者不知		

彼が都市の宗匠たちに学びながら、周辺農村の人々を俳諧の道に誘い入れていたところ、『貝殻集』<sup>かいがらしゅう</sup>という堺の長谷寺秀政という人が編集した発句集が出版された。寛文七（一六六七）年の自序がある。それは堺俳壇を中心に京・大坂・河内・大和などの俳人の発句二二二八句を集めたものである。いまその入集者の地域分布を示せば表1・2のようである。和泉（堺）を筆頭に大坂・河内・大和・山城とつづく。堺は、成之の一九六句をはじめとせずばぬけて多い。その点、堺俳壇の盛期を示すものでもある。大坂では玖也・保友、京では野々口立圃・松江重頼など有名宗匠が名を連ねる。大和は在郷町今井が中心で、三七人のうち三四人を占めている。

さて河内であるが、大ヶ塚は河内全体の入集者の四分の一、句数では実に五割以上を占めている。河内における地域分布を、大ヶ塚については、入集者名と句数を、その他の村々については入集者数と句数のみを表示する。みられるように可正が七三句とこの地域だけでなく、河内全体においてリーダー的な位置を占めている。大ヶ塚の連衆（俳諧の会に列席する仲間）には可正が記していた人々も多くみえ、可正が導き入れたという記述も納得される。大ヶ塚はこの時期の河内俳諧ではまさに拠点的性格を示しており、他の村々はまだ散在的であるといえる。ここにみられる可正の句を少しあげておこう。

松や竹や其外何や門の春

我がたによると鳴也猫の妻

発句にも切字はゆるせ花の枝

坂を下る輪のごとく也夏の月

雪中は夢の精霊歳暮哉<sup>しよりりようせいほかな</sup>

集中に「河内大ヶ塚可正宿所にて」と詞書の添えられるものがあり、可正は自宅に大坂・堺・平野などから俳人を招いて座を結ぶこともあった。寛文一二（一六七二）年にも可正は「新宅座敷にて俳諧会」を催しており、山村（現藤井寺市）の日暮重興が客として招かれ、「世々ふらん今日やざしきの初時雨<sup>はつしぐれ</sup>」とよんでいる（「河内屋年代

記」。

可正はこの寛文期にはまだ三〇歳代であったが、すでに知られた俳人ともなっていた。そして大ヶ塚は、可正を中心として、河内における先駆的な俳諧仲間を形成していた。それにくらべ、他の地域はまだ個人的愛好者が散在するにとどまっている様子がうかがわれる。

前句付俳諧の展開 次の延宝年間（一六七三〜八〇）における河内を中心とした俳諧愛好者については、可正の俳友の一人であり、柏原村の肥料商兼川船の株主でもあった三田浄久の『河内鑑名所記』（延宝七年、一六七九刊）に載せられた寄句者たちにかがうことができる。その巻末に、句を寄せた人々二六〇人の住所一覧が載せられているが、そのうち、河内の人は一一七人と最も多く、ついで大和・大坂・堺の人々でほとんどが占められている。そこには西鶴の五句などもふくまれ、当時の大坂を中心とした俳諧作者たちをだいたいうかがうことができる。撰集の性格が異なるとしても、河内における広汎な浸透普及を示しているだろう。本書ははじめにもこのべたように河内の最初の地誌であるが、それが俳諧仲間という文化的ネットワークを通して成立したものであることは地域意識形成との関係でも注目される。なかで石川郡内の分布は、中村（二人）・神山村（一人）・寛弘寺村（二人）・大ヶ塚村（三人）・上太子村（一人）<sup>かみのたいじ</sup>・春日村（二人）・山田村（一人）以上計二二人である。この分布は石川郡のうち、ほぼ東部にふくまれ、石川支流東条川周辺地域と、大和と河内を結ぶ交通路竹内街道沿いの村々であることがわかる。また石川郡の北、古市郡内の俳諧者たちの分布も壺井村・駒ヶ谷村・大黒村・誉田村・古市村など石川周辺の村々である。このことは俳諧の普及路も、河川や街道という人的交流と商品流通路の上に展開しているものであることを示す。

ところでこの浄久は西鶴によって「無類の俳諧好、老のたのしみ是ひとつ」とした人といわれているが（『西鶴名残の友』巻二）、同時に彼は、河内一円の前句付俳諧の取次や清書を行っており、大坂の俳諧点者（俳諧の優劣を評点する師匠）と河州農村の俳諧愛好者のあいだを結ぶ媒介者ともなっていた。前句付とは、点者が出題した七・七

表3 『河内鑑名所記』所収の狂歌・俳句の作者の分布

国	郡	村	読人数	狂歌	俳句	国	郡	村	読人数	狂歌	俳句	
河	石川	中村	2	4	81	内	澁川	植松	1		1	
		神山	1	2				太子	1		1	
		寛弘寺	2		8			竹淵	1		1	
		大ヶ塚	3	2	19			鞍作	1		1	
		上太子	1		4			衣摺	3	8	12	
	古市	春日山	2	3	17		若江	八尾	5	29	20	
		壺井	3	2	13			八尾東郷	2	2	5	
		大黒	1		1			萱振	7	1	11	
	丹南	野中岡	駒ヶ谷	1			2	高安	若江	7	4	13
			古誉	1			2		御厨	1		1
志紀		古誉	3	2	42	交野?	三島	1	1			
		小国	1		2		野	3	3	4		
内	安宿郡?	山府	4	6	10	和泉	智谷	3	1	15		
		大井	3	1	15		大窪	1		6		
		柏原	4	9	12	摄津	交野	1		2		
		弓削	4	2	11		?	仏眼寺	1	1		
	丹北	津堂	国分	5	2	17	大和	堺	7	21	16	
			田辺	1		2		武蔵	大坂	34	22	137
		北	北島	2	2	2	伊勢		天王寺	5	13	53
			小川	1	2	1		備後	平野庄	3		3
		三宅	1		1	豊後	天野		6		8	
		田井	1		4		計	大和	69	90	189	
布忍		6	7	25	山城	山城		2	4	7		
住道		2		2		伊勢	江戸	13	3			
太田		3		3	備後		神戸	1	1			
木本		4	6	22		豊後	福山	1		3		
出戸	1		1	計	玉来		1		4			
									260	261	866	

注 山口之夫「延宝～元禄期の河内の農村文化」(『政治経済の史的研究』1983年)による。



の短句に対し、五・七・五の長句を付けて、その付合つけあいの優劣を楽しみ競い合う（点取）俳諧である。当初は俳諧の付合修練の入門的意味あいではじめられたものが、しだいに独立し遊芸化して雑俳として展開されていくのである。それはまた、俳諧の付合が、これまで同席合評を原則としていたものを、前句付俳諧は点者と作者とのあいだを仲介する第三者（取次・清書所せいしょとこ）を登場させ、作者たちが同席しなくてもよい方法をつくりだした。都市在住の点者と距離的にへだてられ、また農商の業に暇をえにくい、地域庶民層に俳諧の付合を遊芸文化として普及させ、またそれを彼ら自身の獲得した新文芸として展開させていくうえで大きな意味をもつものであった。（宮田正信『雑俳史の研究』）

しかも、この前句付俳諧は『俳諧高天鷲たかまうけす』の元禄九（一六九六）年の序によれば、もともと万治年間（一六五八～一七〇〇）に河州小山村（志紀郡）の日暮重興の創案になり、泉州堺の池島成之を点者として始められたのが最初であった。つまり、この南大阪で俳諧の受容にさいし、農村庶民が参加しうる新たな文芸の形態が創出されたということである。それがしだいに京・大坂・江戸その他の諸国におよび、元禄期の盛況をもたらした庶民の文芸として展開されてゆくのである。

庶民の文芸 大和御所の平野良弘編の『俳諧高天鷲』（元禄九年刊）は、このような状況に棹さすものとして、大和・河内の各清書所せいしょとこで行われた前句付清書本から勝句（すぐれた句）を五句～一〇句ほど書き抜き、総計四千余句を選んで清書所ごとに編み、前句付の盛行を宣伝しようとしたものであった。そこに示された清書所は大和国で計二六カ所を数え、なかでも御所・今井は一〇回以上登場する。それに比し他地域では河内七カ所（国分三回、山田一四回、八尾一回、久宝寺二回、佐太四回、古市二回、瓜破一回）であり、他は伏見と摂州平野郷である。河内ではやはり大和との交通路竹内街道沿いの山田村を清書所とするものが多く選ばれている。なお清書所は、その周辺村々数カ所にわたって前句を取次しており、その清書所のネットワークは大和南部全域に張り巡らせていたようである。点者には京の如泉・似船・言水など一三人、難波の点者には小西来山、一時軒惟中、北条団水、水田西吟な

ど談林系の人々が一七名みえる。当時の代表的な都市の宗匠が前句を出題し、点評を行っている。前句付俳諧は、彼らにとつて点料収入として生活を支えるものとなっていたのである。つまり俳諧の盛行の半ばは、このような農村地域の人々によつて支えられていたといつてよい。

元禄一六（一七〇三）年、やはり前句付俳諧の勝句集『俳諧日本国』が刊行された。これは八尾の秋月堂清倍という人が、『俳諧高天鷲』が大和中心であったのに対抗して、河内を中心とする前句付俳諧の盛行を宣揚し、勝句として選ばれて入集した人々の名が「日本国へ鳴りはためかん事を」を願つて出されたものである。数千句集めた句の中から約三分の一ほどを勝句として清書所ごとに編集している。河内が中心であり、清書所は河内だけで三五カ所を数え、計一六七五句みえる。八尾周辺の中河内が多いが、道明寺村や誉田村、西浦村、三宅村など南河内の村々もみえる。点者は京都の俳諧師もみられるが、河内はほとんどが浪花点者によつている。小西来山・中村一礼・北条団水・斯波園女・水田西吟など一四名がみえる。

この前句付俳諧は、天和・貞享期（一六八〇年代）には流行し、南河内地域にもその愛好者はかなりいたようである。三田浄久は大坂の点者と河州作者たちのあいだの媒介者としてあつたが、彼はさらに小地域の媒介者に向けて点者の出した前句を送付し、それへの付句を在村愛好者たちから募集し、最終的に浄久のもとへ回収して清書を行い、その清書本を点者へ送つて加評点付をうけ、それをさらに今度は、付句作者たちに送付回覧して、各自の付句がどのような評価をうけたかを確認させるのである。その評と点をみるのが、投句者たちにとつて、最も興味関心をひく楽しみとなつたのである。およそそのころの付句一句についての投句料は錢一〇文ほどであつたらしい。この投句料は、俳諧を愛好するものなら、それほど富裕でなくとも、投句が可能であつたにちがいない。また一人で何句をも投句できた。庶民の文芸への憧れを微妙にくすぐるこの俳諧は、俳諧仲間という新たな人々の結びつきをつくりだすとともに作句それ自体の楽しさと簡易さ、そしてその評価への期待感を通して人々のあいだに急速に広まつていった。



数寄者氣質すきしやくたぎと一句付 それでは、元禄期におけるこの地域の俳諧の様相はどのようであったのか。『可正旧記』によれば俳諧の普及はしだいに地域を拡大しつつあったが、「此頃（元禄六年・一六九三ごろ）は一句付と云事国々にはやりし故、郡中不残のこらずはやりもて来て、女子童べ山賤やまがつ（きこりなど山中に住む人びと）の類迄もてあそぶやうに成たり」と記す。これはまさに一句付という最も簡単な前句付が元禄期、南河内において非常な盛行をみていることを語るものである。俳諧として有していた四季・恋・雑といった部立てによる六句付や、言葉遣いの煩雑な規則を排し、だれもが自由に前句に対して一句を付けるというよみ方が盛行している様子を示している。「女子童べ山賤の類迄もてあそぶ」というのは、一部の数寄者層による前句付俳諧から、広汎な庶民による俳諧の雑俳化へという大きな変化を語っている。

可正のように雅文芸として俳諧を意識してきたものにとつては、かえつてこのような形の俳諧の盛行は、苦々しい思いでみざるをえなかった。可正は一句付俳諧の点者などをさして「不学無才、唯生れつきの口のきゝたるばかりにして、世を渡るよすがにせんとて点者」になつた者といい、「我慢を先として正道を忘れ、錢に心を寄て邪路に落入たり」と非難した。その地域の者にも「一句付なんどになすむ事、かたく無用」といいつけ、可正みずからも、しばらく「俳諧の遊び業」をやめたほどであった。しかし、庶民にとつては、言葉の遊芸性を身につけることで、生活への多様な視角をもち、事物への新鮮な対応を可能にする方法ともなつたのではなからうか。

『俳諧仕合丸』 それでは当時、実際にこの地域でどのような人々が、どのような句をよんでいたのであらうか。元禄一〇（一六九七）年、園女そのめ（芭蕉門下）の点になる『なつころも』と題する前句付清書本が知られている。前句は「しるもしらぬも知るもしらぬも」と「げにおもしろき所なりけり」の二題で、それぞれにつき二四句、二七句の付句応募があつた。その付句者の最も多くを占めるのは富田林で、ついで八尾・三日市・新堂・上田という主として町場地域である。そこにみられる付句はたとえば前者に対しては、

梶原に似せる役者ハ悪にくまれて 富田林 梅子

乗合は諸国の人の雑喉寝ざごねにて 同  
 また後者に対しては

春の末花喰まぜて茶漬食 富田林 定之

見物して死なば桜へ魂帰れ 同 祀金

というような、かなり風雅を意識した句なのである。これは一句付ではあるけれども、この元禄一〇年ころには、これら町場地域では、少数の教寄者層が雑俳化へ向かう庶民層に押されながらも、熱心に俳諧活動を行っていたことを示している。

しかし、可正の記述からは、この時期の雑俳的な一句付清書本が数多く見いだされてしかるべきである。が、ただようやく一本を見出した段階である。それは『仕合丸』と貼題だいせんのある清書本で、享保五（一七二二）年一月のものである。内容は、前句付が五題出題に対し、計二三四句の付句集である。点者は「水落陋夫柳階」と署名する。すなわち享保期の堺を中心に活躍した奥田柳階である。柳階によって評を加えられた付句は計一三一みられ、さらにそのうち秀句とみられるものについて一から二八位まで順位を付している。また通常、清書本によくみられるように、評価を示す各種の点印が押されている。ただ残念なことにこの清書本の取次がだれであったかはわからない。

注目されることは順位を付された秀句二八句に

表4 『仕合丸』秀句入集者居村別表

村名	秀句者	【名所記】所載
北大伴	7	
神山	4	○
平尾	3	
大ヶ塚	2	○
白木	2	
森屋	2	
北野田	2	
富田林	1	
喜志	1	
山田	1	○
芹生谷	1	
壺井	1	○
通法寺	1	

注 ○印は記載あり

ついで、作者の俳号とその居住村が記されていることである。それを村別にし、さきの『河内鑑名所記』での登載の有無をみると表のようである。

俳号と村名のみで、通称名が知られないのは残念であるが、これによれば秀句吟詠者の分布は石川郡東部を中心に一三カ所にわたっており、なかでも北大伴村の七人という数字は注目される。それについて神山・平尾・森屋・大ヶ塚・白木・北野田とつづく。大ヶ塚・富田林を別とすればほとんどが農山村に属する村々である。表4にみるように延宝七（一六七九）年の『河内鑑名所記』に記載のなかった村が九村も、この享保五（一七二二）年の時点では新たに見いだされる。元禄期をさむ約四〇年のあいだに、可正が記したような急速な一句付の盛行をみたことを反映しているだろう。これは秀句者のみの村数であって、付句に投句した人々はもっと広汎に及ぶ可能性もある。しかしおそらく、この『仕合丸』はさきの『貝殻集』や『河内鑑名所記』とは異なり、一地域に浸透してきた一句付俳諧を、互いに顔を知りあっているほど親密な関係の人々が、小規模に、しかし熱心に催した一産物ではなかったかと思う。そして同じ一句付でありながら、元禄一〇年の『なつころも』が風雅を保持しようとする限られた町場の人々によるきわめて少数の付句集であったのに対し、『仕合丸』はその投句の数の多さにおいて、すでに異質な性格を示しているよう。

『仕合丸』の句 それでは、ここにみられる句はどのような句だろうか。一位を与えられた句はつぎの句である。

（前句、歳か楽しや〜）

米船か須磨の浦にて年を取 大ヶ塚 水内

おそらくこれは、新たに収納された西国米（九州地方の米）を大坂へ運んでくる船が、ちようど名所須磨のあたりで新年を迎えたというめでたい情景をよんだものである。これに付した柳厩の評は「年取船の仕合丸心の詠、私欲のおほはれは望月も聞く、俗々性を損なひ」と記されている。後段はどのような意味で付した評なのかわかりにくい、この清書本の題名『仕合丸』というのが、この句によって付けられた題名であるということがわかる。し

たがってこれは「シアイ」ではなく「シアハセ」丸と読むべきであろう。

(同前)

戸障子のいの字で親の戎顔えびす評 「八歳而入小学門」(八歳にして小学の門に入る。)

これは八歳くらいになったわが子が手習いに行つて覚えた「い」の字を障子に書いてみせたのを親がよろこぶ情景をよんだものである。

(同前)

悪ささへ見事日記は付るけな評 「牛の角もじゆがみもじ」

これも、おそらくいたずらざかりの子どもが意外にも日記をつけているのをなけば感心している親のつぶやきにも似た句であろう。その他、任意にあげれば、

(前句、世の中に句のない人も有ル物か)

夜ルは酒屋を鼻て尋る

色深い息子は医者の手におへず

瓢箪で膝を撫たる浮世酒

富箱を振れば我か名も飛揚ル評 「欲につれて心もひよつとく」と

雅味に力点をおいた句も多くみられるが、どちらかといえば、卑近な日常生活の機微にふれた滑稽味ある句が多数を占めている。さきほどの可正の句や『なつころも』の句とはかなり趣の違いが感じられよう。そこには、ことさら風雅を意識することなく、だれもが自分の周囲に発見しうる素材情景をよみ、そこに新たなおかしみ、おもしろみを発見しようとする姿がある。それはたしかに俳諧の俗化ではある。しかし、それはなによりも、生活を単調にすぎしがちな村の人々の生活に、新たな楽しみとなり、仲間とともに生活を生き生きとしたものとして、日常を再発見してゆくという意味をもちえたのではないだろうか。一句付を契機とする俳諧の庶民化・雑俳化とはこ

のような状況のことである。

雑俳の普及 俳諧が字を知り、言葉を知るための有効な手段であり、教養文化への志向をも満たすものであったこと、そして「謡は俳諧の源氏」（田宮仲宣『愚雑俎』）といわれるように謡曲とも密接な関連のあったことも、俳諧の普及に一定の役割を果たしたにちがいない。また身分生活をそのまま示す通称名ではなく、俳号という文化的平等呼称で交流しあうことも大きな魅力であったろう。しかし、より大きな理由は、生活事象に対する感覚や意識を、地域の同好者とともに、日々活性化してゆく喜びや楽しさがあつたからではないだろうか。そうしてそこに経済や行政とは異なつた、文化を媒介とした人々の結びつきとしての新たな地域が形成されてくるのである。これらのことは、断定はできないにしても、能謡の享受者や数寄者層よりも、もっと幅広い地域や階層の人々の参加をよびおこしたとみられる。それらが在郷町にほぼ限定されつつあつたのに対し、雑俳は農村部への普及浸透がかなりみられるのである。今後の清書本の発掘に待たねばならないが、このような俳諧仲間がこの地域ではいくつもつぐられ、互いに交流しあいながら活動していたのである。そこには在郷町の能・謡曲文化、数寄者文化に対し、周辺農村部の雑俳文化ともいえる文化の地域的・階層的な分化を予想させるものがある。

## 二 学芸拠点としての大阪とその交流

### 1 学問を求める町人たち

仁齋と梅岩と「人の外に道なく、道の外に人なし。人をもつて人の道を行う、なんの知りがたく行いがたきことかこれあらん」（『童子問』）と述べたのは伊藤仁齋である。

元禄期京都の町衆であった仁齋は『論語』を熟読し、町人社会の人々が織りなす共同的規範性を踏まえて、人之道を語りだした。道は「人倫日用当行の路」（『語孟字義』）とされ、町人社会は儒教実践の場として見られることになる。高度に観念的とみなされがちであった儒教（朱子学）が、この仁齋学によって「日用卑近」のなかに真実を見出す学としてとらえなおされた。儒教が町人庶民のものとなるうえで、このことは大きな意味を持つ。

享保期に入ると、武士財政難を背景とした商業抑圧政策、士農工商の序列意識の進行とあいまって、商人、商行為を劣視する見方が台頭する。そのことは町人社会の人びとに家業の維持と、商人・商行為それ自体の意義づけを課題として迫ってくるものとなった。

そのような課題を担って登場した人に石田梅岩ばいがんがいる。梅岩は京都の商家奉公人であったが独学し、儒教を中心に神道・仏教をも取り入れながら、のちに心学と呼ばれる庶民思想を形成した。梅岩は、人間の本質は天から賦与された「心」にあるとし、それを極め知ることの必要を説いた。しかしそれは観念的なものではなく、「形によるの心」といい、具体的な形としての職分の遂行を通して「心」の実現があるとした。勤勉・儉約・正直などの徳目も、自己実現のための努力内容を示したものであり、それを通して、天と人の結びつきをもった自信に満ちた行為が可能だとしたのである。そうして商人の道も「天の一助なり」、「何ぞ士農工の道に替わることあらんや」、「商人の売

買するは天下の相（たすけ）なり」（『都鄙問答』）と述べ、商人が職分を通して天と一体化した自己の実現を求めようとする限り、その活動は普遍的正当性をもつとした。

梅岩が職分の遂行と道德的実践をとおして町人の位置づけを行おうとしたのに対し、学問を中心に置いたのは平野含翠堂と大阪懷徳堂であった。

含翠堂 元禄期、大坂の根生ねおいの儒者であった五井持軒ごいしけんは福岡の学者貝原益軒にあてた書簡のなかで次のようにいつている。

この地、儒学尊信の人あまた出来申し候。お編みなされ候御書籍数々印板に御座候を人々見申し、尊信称美はなほだしく候。その中、五、六人ことのほか信従に候ゆえ、ご手跡を申しうけたしと申され候。

大阪に儒学を尊信する人々がようやく現われてきて、その人々は貝原益軒が著した書物の愛読者で、とくにそのうち五、六人は心服しており、益軒自筆の書き物をいただければと願っているというのである。ここには益軒本を介して大阪の庶民層における儒学への胎動が鮮やかに示されているが、実はその中心になったのは平野郷の人々であった。持軒はつづけて次のように述べている。

平野と申すところ御座候。その地に儒学尊信の人数輩これあり候。珍しきことと存じ候。皆々知人になり申し候。そのうち、三上如幽と申す人、ことのほかすぐれたる人と見え申し候。

このような動きが大阪市中ではなく平野から、しかも複数の人々による動きとして形成されてきたこと、その人々と知り合えたことを喜びと期待とを以て益軒に語っている。

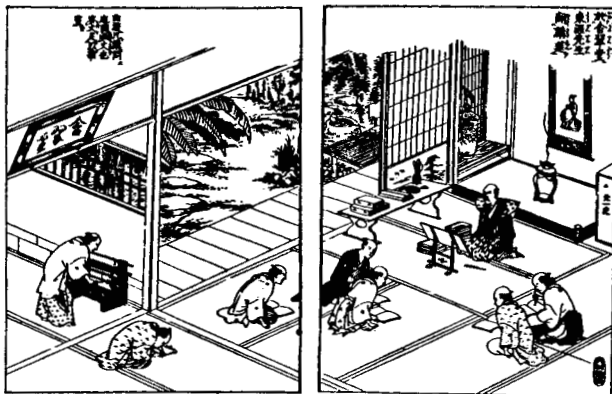
平野郷は綿の集散加工地として発展した大阪近郊の人口約一万を擁する大きな町場であったが、高率年貢の上、元禄期ころから綿の生産加工が各地で進展するなかで次第にその経済的地位に陰りが生じつつあった。平野郷の運営は坂上田村麻呂の子孫と称する七名家しちみやけが惣年寄となつて行われていたが、経済的不安とそれに伴う地域社会の動揺はその人々にも危機感を芽生えさせていた。



その中でもっとも自覚的な動きを示したのが、三上如幽の養子として泉州貝塚からきた土橋友直であった。元禄期に友直は京に遊学して、河瀬菅雄に歌学を、儒学ははじめ仁斎に入門し、のちに陽明学の三輪執斎みわしゅざいにしたがった。平野に帰った友直は地域社会のありようを人々の精神的自覚を通して立てなおそうとした。平野には中世末以来、連歌を中心とした文化的伝統があったが、友直はそこへ儒学を中心とした講習会活動を定着させようとしたのである。困難を伴いながらも、享保二年（一七一七）にいたって、恒久的な講舎をもつようになる。それが三宅石庵によって命名された含翠堂がんすいどうである。

含翠堂は地域の有志が自発的に資金をだしあつて自分たちで運営した教育施設である。それは領主によって設立され保護された藩校や郷校とも、また特定の学者が自分の学問を教えるため自宅を教場とした私塾とも異質である。興立生員とよばれた一定の同志が定期的に資金積み立てを行い、それを預金してその利息を経常費にあてるといふ運営方法をとった。このような在り方は懷徳堂の直接の前提となる。

含翠堂の活動 講義は友直を中心に同志が交代で行ったが、しばしば外来講師が招かれた。五井持軒・三宅石庵・三輪執斎、そして享保二二年・十八年には仁斎を継いだ京古義堂の伊藤東涯の来講があった。それぞれ学問的には異なる人々であったが、含翠堂では特定の学問内容への関心というよりも、それらの人々の学問的人格的達成を通して共通の在



伊藤東涯講義図（摂津名所図会）



り方を求めようとしたのであろう。

しかし、その間、享保一二年には土橋友直が、そして同一五年には三宅石庵が没した。含翠堂の支えともなっていたこの二人を失ったことは、学生たちに方向を見失わせる事態を招いた。ちょうど来坂した三輪執斎に人々は方途を示してくれるよう訴えた。執斎は道を求めるのに一定の法はないとしながらも、次のような在り方を説いた。

「但願くは諸君こゝに顧み思ひ、富み貴きは貧しく賤しきをくたり慈しみ、貧しく賤しきは富み貴きを親しみ戴き、才ある者は拙き者を教へ、愚かなる者は賢きに倣ひ、相共に進ては公の賦役を重んじ、退いては父兄に事へ妻孥を育くまば、その説く所異なる所ありとも、共に堯舜（中国古代の聖人）の徒たるへし」（「含翠堂記」と）。

階層分化の進んだ地域社会の中では、相互扶助的な生活一体感を培うことが重要であり、各自の人間の成熟もその遂行を通して実現されるということであろう。

享保一七年（一七三二）の大飢饉は平野にも大きな被害を与えた。これに際し、含翠堂は別に積み立てていた救恤資金を拠出して地域社会の救済にあたった。一般的な教説ではなく、具体的な行動を通して地域の学校としての姿勢を示したのである。このことは含翠堂を地域全体の人々にその存在意義を認識せしめる効果をもたらした。これを機に従来の七名家を中心とした基盤が、郷全体に広がるものとなった。同志による掛銀制から、より広い支持基盤に立つ自由寄付銀制へと移行することとなる。こうして含翠堂は以後変転しながらも一八七二（明治五）年の学制開始に至るまで活動を続いたのである。

しかも、このような動きは含翠堂のみではなかった。伊藤東涯が享保一八年に来坂したとき、八尾の人々からも招かれて講義を行った。それを機に八尾にも環山楼（東涯の命名）とよばれる講習の場が形成され、在郷町周辺の人々の学芸意欲をひきだすものとなったことも忘れてはならないだろう。そのような動きの中で懷徳堂の設立もあつたのである。

懷徳堂 懷徳堂は、享保九（一七二四）年、大坂の有力町人たちによって出資設立された学問所である。商人た

ちは、営利のためでもなく地位獲得のためでもなく、人間と世界を広く深く深く認識することによって自身の生活を充実させ社会的に定位するための学問として、儒教を求めたのである。このことは、何のために学問するかという問いかけへの、中国とも西洋とも異なる独自の応答として注目される。同時に、ここに日本の生涯学習社会の歴史的基盤がある。

初代学主の石庵は元禄一三年（一七〇〇）年頃、香川・丸亀から来坂した。儒学者として知られながら、一方で俳諧をたしなみ、売薬も行い、謡いもよくした。つまり商人たちの生活文化に通じた人であつたらしい。書簡によると、学ぼうとしている者がどんな問題を抱えているかについての確な解答を与えている。

「義理と人情とはつかへ無之者にて候」。義理と人情は決して対立する概念ではない。相手に対して、そのとき、その場で自分には何ができるかを考えることが肝要だと説く。たとえば泥酔者に対し、義理の立場から「いけない」と論理を振りかざしても意味がない。それより、その場で精一杯介抱してやるのが大切ではないのか、とわかりやすく人のあり様を示している。

享保一一（一七二六）年、懷徳堂に幕府から拝領地が与えられ、官許の地位を得ることとなる。開講講義で石庵は「今日は今日の己れが身一ぱいの悦びたのしみ不愠（怒らず平静なこと）あり。それが今日一ぱいの君子なり、明日は又明日なり」と語った。「今日」を力一杯生きることが大切であり、それが明日につながるという。固定観念に縛られずに、その時その場での対応に価値を置く石庵の融通無碍なスタンスに対し、一部からは「ぬえ学問」と評された。

しかし、町人にとってみれば、やれ朱子学だの陽明学だの区分はどうでもいいことであろう。学問を専門的立場から解き放つて、町人たち自身の学としてとらえなおそうとしたのだ。それを石庵は「天下の公学」とよんだ。

『雨月物語』で有名な上田秋成は堂島の油商の息子だったが、きわめて辛辣で悪口の巧い人だった。それでも『胆大小心録』で「万年先生（石庵）の時はさして学問をさすではなしに、むすこを先あづけて、よい事を少（し）

でも聞（か）す事のみ」と懐かしそうに記している。実際、学生は水汲み、風呂沸かし、掃き掃除、行灯や煙草盆掃除が義務づけられていたという。

テキストを踏まえながら、それをそのまま観念的に押し付けるのではなく、具体的、リアルに生活レベルで教え込む。そのような門人たちとの応答を通して町人の心をしっかりとつかみ、道を付けた。その時、その場での人と事物に対する精一杯の対応。これが懷徳堂の基調を形成した。懷徳堂は以後、学問的深化と社会的地位において一定の変容をしながら発展する。そして四代目学主、中井竹山ちくざんの時、大きく発展した。

竹山は自身が「懷徳堂そのもの」といってよいほど一体化して発展させた。その努力は公的学問所としての地位確保に向かった。敷地は幕府からの拝領地であり、町人としての負担すべき公役・町役も免除されていたが、さらに推しすすめて公的地位を明確にしたいと努力した。「官学化」しなかったのである。

真の学問的自由獲得へ 傍からみれば幕府に擦り寄り、阿おもんる行為だ。秋成はその点を揶揄した。竹山の意図はどこにあったのだろう。竹山は数々の招聘をすべて断るほどの大学者だった。もちろん自分のためではない。彼は懷徳堂を幕府の手厚い保護下におくことによって、学生たちの自由な思考、のびやかな発言を守ろうとした。外を固め特権化することによって、ようやくそれが可能となると判断したのだ。

日本は中国と違い、科挙制度のような官吏登用試験がない。いかに学問があっても社会的地位には結びつかない。ならば、せめて学の力、文章の力を通じて社会に働きかける。それこそが民間学者の使命である。「ここなら何を考え、何を語っても許される」という空間が必要だったのだ。学問的自由を守るために、幕府を利用する、という危ない綱渡りを竹山は行おうとした。

事実、松平定信が「寛政の改革」にあたり、大坂城に竹山を招き諮問している。竹山の『草茅危言そうぼうきげん』はそれに答えた改革意見書であるが、そのなかで、「民間にて儒者という名目の立ざること怪しけれ。（中略）民間にある学者を主とする也」と述べている。「民間にある者こそ真の学者なのだ。その力量が懷徳堂にある」と主張している。民

間からする公的世界の再編成である。

懷徳堂は実際に九州、四国など各地の民間学者たちを結びつけるネットワークの中心となった。竹山の弟、履軒は懷徳堂とは別に水哉館すゐさいかんという塾を営み、豊後の哲学者三浦梅園や、天文家麻田剛立あさだごうりゅうらとも交流し、儒学の新たな解釈を推し進めた。石庵が生活レベルで示したその時その場での人と事物への的確な対応という主題を、履軒は学問レベルで基礎づけたといえる。

同時に履軒は借家の一室を「華胥国かしよこく」というユートピアに擬し、夢の世界を仮構し、そこから現実を批判した。『華胥国物語』は理想社会を描いた「夢」の著述であり、『越俎弄筆えつそろうひつ』に見られる人体解剖の図示と解説や、天体図、地球図は現実がいかに未知の世界に支えられているかを探求しようとしたものだ。しかも、履軒は大坂市中の借家を転々とする民間学者としてそれを成し遂げたのである。

木村兼葭堂 このような懷徳堂の展開に加え、大坂が学芸交流の拠点となっていく上で、大きな役割を果たした人間がいる。木村兼葭堂けんかどうである。兼葭堂は（元文元（一七三六）年～享和二（一八〇二）年）、江戸中・後期の博物学者で、詩文・書画・篆刻をよくし、また奇物収集家にして大蔵書家であった。

大坂北堀江の酒造家で、通称は坪井屋吉右衛門と称したが、屋敷の古井戸から葭の根にちなんで、その書齋を兼葭堂と名づけた。

兼葭堂は青年時、本草学（動物・植物・鉱物などにつき有用性の観点から研究する学）を京の小野蘭山に、詩文を片山北海に、画を柳沢淇園・池大雅いけのたいがに学ぶなど、十八世紀なかば上方に新たに形成された学芸百般を身につけた。兼葭堂とはその本草学を中心とした博物標本と蔵書の収蔵の場であった。

それは一見、富にまかせた奇物珍書の収集家とみられることを避けられなかったが、しかしみずからは「世人余が実ヲ知ラズ、豪家ノ徒ニ比ス、余ガ本意ニアラズ」といい、「奇ヲ愛スルニ非ズ、専ラ考索ノ用トス」（自伝）と語ってやまなかった。

兼葭堂が多様な学芸を身につけることで果たした役割の一つは、分散していたおのおのの学と人を結びつけて交流の拠点を形成したことである。たとえば兼葭堂という詩文会は各地からの来坂学者と大坂の町人学者を結びつけ、詩文運動の結社混沌社を形成する母胎となったことである。

一方収集の場として知られるようになった兼葭堂には全国からの来訪者が踵を接して訪れている。『兼葭堂日記』はその訪問来客記録といつてよく、その数約七〇〇〇人、のべ人数は四万人近い。兼葭堂が学芸のネットワークの要であり、たがいを媒介する交流拠点になっていたことを如実にしめしている。しかも有名無名、年齢・身分を問わずに接し、その接触を通して多くの人々がみずからの学芸意欲を高めるきっかけとしていたことも注目される。

このように兼葭堂は多忙な活動のなかに身をおきながら、生活と学芸の時間割を定めるなど、家業を落とすことなく、学芸との両立を厳しく維持しようとした。その存在は市井の人々の学芸への志を励まし支えるシンボルともなった。そしてなによりその学は、物そのものへの愛着にあふれ、個を切り捨てるような体系性を排し、個物・個別性を尊重する精神で貫かれていたことである。個への愛着と収集という「無邪気」ともいえる学芸関心の初心を保ちつづけ、知ることの楽しさを生きがいとした人であった。

## 2 混沌社と学芸社会の成立

混沌社 混沌社の成立は明和二（一七六五）年九月である。混沌社という命名は田中鳴門めいもんによるもので、新氣運の胚胎を含蓄するものという。同月一六日に初会が催されたが、そのときのメンバーは次のようであった。

片山 北海（四三・儒）	福原 丹安（五七・医）	田中 鳴門（四四・商）
清 玄道（不 明）	佐々木魯庵（三三・医）	福原 承明（三三・医）
葛 子琴（二七・医）	吉田 謙斎（二二・士）	阪東 道斎（五〇・商）

富山 維章（不 明） 平沢 旭山（三三・儒） 木村兼葭堂（三〇・商）  
 岡 公翼（二九・医） 岡田 南山（二四・士）

これに一〇月の会から参加した篠崎三島（二九・商）を加えると、発足時のメンバーは一五名であった。当初、社では、この毎月既望（一六日）の午後に関われる会を甲会と称し、毎月二六日午後に関われる北海の門下生を中心とした会は乙会と称された。会集は盟主片山北海の営む孤雲楼（平野町淀屋橋北横町に移居）で行われた。

北海は他郷出身者ではあったが、学力年齢が長じていただけでなく、その人間が飾り気のない恬淡な人柄で、心ひかれる魅力的な人間だったことが、『在津紀事』、自然と彼を盟主にいただかせたのであろう。翌明和三年には、鳥山嵯岳すがくが門下をつれて参加し、同年三月には安芸（広島竹原）から再度来坂した頼春水（二二・商）が加わり、さらに河内一津屋（現・松原市）の儒医北山橋庵が参加することとなる。以後、橋庵宅は混沌社友の別荘の趣をもつようになり、毎年初夏、訪れるのが習わしであったという。こういう参加をえて、混沌社は自らの活動に自信と活気をもち、活動の隆盛をみることとなるのである。

頼春水は当時最年少の社員として加わったが、彼においてこの混沌社時代は、最もみずみずしく清新の気にあふれた時代であった（春水の在坂は明和三（一七六六）年二一歳のときから天明元（一七八一）年三六歳までの一六一年間にわたる）。春水が晩年になって、この時代の交流を回想して綴ったものが『在津紀事』であり、混沌社の人々を最も生き生きとよく伝えるものである。それによると混沌社での定例詩会の在り方はつぎのようであった。

定例詩会 社では詩題を分ち、それに対して各々韻を探って各人各様のしかたで詩想を練るのであったが、その共通の方法は、「詩成るや、凡上一紙を取りてこれに書す。別に稿を立てず。蓋腹稿けだしすでに熟すればなり。故に書するに臨んで躊躇あることなし。故紙狼藉あることなし」というものであった。この方法は盟主片山北海の方法であり、混沌社の同人は、巧拙を論ぜず、皆これにならったという。それは中途半端な気持ちで下書きを何度も書き



替えて改稿することを許さず、精神の集中をぎりぎりまで求め、心決したなら、一気呵成に書き下すという厳しい方法であった。しかしそれは決して固苦しい静寂さのなかで行われるのではなく、会には酒饌豊かに出され、ときには歓談をも交えながら、柔軟な雰囲気の中で韻を探り詩を賦すのであった。互いに束縛しあうのではなく、各人ができるだけ自由な気持ちで自分自身の詩想に集中することが必要だったからである。書き終われば社友たちは、小詩短文といえども必ず互いにみせあつて訂正を請い、最後に北海について定論を求めた。その北海自身も、自作の詩文は必ず社友に意見を求め、春水のような年少者に対しても区別しなかつたという。

ここには年齢・階層をこえて、詩文の研鑽を通して人々の共生の場が実現していた。互いに必ず見せあうということのなかにひとりよがり戒める厳しさと、互いを啓発しあう効果を含ませ、そしてなによりも巧拙を論ぜず各人の自由な創作が尊重されていた。ここでは各人を一定の考え方や、塾や教育機関にみられるような師匠の風に従わせようとすることもなく、各人の創作そのものが互いに響きあつて、会全体が動いてゆくという形をとっていた。それは詩文を中心としながらも、かれら青年の学芸への関心と熱意によつて維持された一つの運動体であつた。混沌社は決して固く組織化されたものではなく、学芸を通しての人と人との交流が自然と一つの連繋をなすというかたちでの自由なつながりであり、交流すること互いに刺激しあい、それらがよりあわさつて精神的動きを醸すような、まさに「混沌」とした運動体であつた。「精神の共和国」と評される所以である（中村真一郎）。

頼春水と葛子琴 頼春水は最も若き学徒として、また従来の門下系列からも比較的自由的な立場にいて、各人間の交流を活発に周旋した。彼が最も親しく行き来した社友の一人は葛子琴かつしきんであつた。子琴は詩作において牽引者の役割を果たした人で、その詩は京の六如などとともに宋詩風の開拓者として高く評価されている（富士川英郎『江戸後期の詩人たち』中村真一郎『頼山陽とその時代』）。その交流はたとえはつぎのようであつた。

夏夜炎蒸して寐ねられざれば、夜半月に乗じて起き、行きて子琴を訪う。子琴もいまだ寐ねず。余が蛩音あしおとを聞けば即ち欣びて迎え、楼を開きて小酌す。まさに帰らんとするや、子琴必ず送りて玉江橋に到り、また共に橋欄に

寄りて、聯吟して別る

心鬱積して無性に誰かと話したいとき、時と所をかまわず、友を呼びだすというのは当時も今も変わらない青年期の特権である。彼らはこのようにしばしば夜の大川の流れをみながら語りあい、詩を詠じたのであろう。春水は江戸堀北一丁目に春水南軒と称する塾を営んだが、そこは各人を見えない糸で結びあわせる接点として、また運動の潮が引いては押し寄せる場として感じられたにちがいない。その南軒をつぎのように詠じている。

南軒 吾が愛する所

夏日 薫風に倚より

坐して 長流の水を見れば

吾が心 渺（限りなくひろがってゆくさま）として窮きらず

大坂学芸文化の基盤 混沌社に参加した人々は、年齢・出身地・出身塾・出身階層・現職それぞれにおいて多様な人々から成っていた。当時の職業においても、儒家・医家・商人・武士とそれぞれ六〜七人ずつ存在し、職分階層をこえた集まりであったことは歴然としている。なかに商家や農家でありながら、破産あるいは自分の意志で儒者として新たに立身しつつあるものが四〜五名いる。

さらに注目されることは、ここに集まった人々は大坂人も多いけれども、純粹にそういえる人は意外に少なく、それ以上に近畿北陸以西の各地方からこの当時来坂して活動した人が多いことである。つまり混沌社は大阪に成立し、大阪に学芸文化の基盤を培ったのであるが、それを担った人々は大坂以外の出身の人が多いのである。それは単に大阪が商品流通と同じく、人的交流も活発だったということだけではないだろう。

そこには、懷徳堂をのぞけば学問的蓄積もまだ浅く、伝統的な学派勢力も形成されていない大坂が、かえって新たな学芸意識をもつ人々にとってはひきつけられるものがあり、より自由に新しい運動を展開する好条件を備えているとみられたのではないだろうか。混沌社はまさにそういう条件のもとに成立したのであり、この点にその一



特質があるといえる。混沌社はこうして懷徳堂とともに大坂に学芸文化人社会というものを成立させるとともに、西日本全体に学芸を媒介とするネットワークを形成する上で、大きな意義をもつものとなった。

### 三 在村知識人の形成と交流

#### 1 遊学者と地域社会

遊学者 元禄～享保期、俳諧や能・謡を中心としていた地域庶民の文化は、都市における学芸文化の展開にどのようなゆり動かされたのであろうか。河内という、一万石の小藩を二、三含むとはいえ、ほぼ全域が身分的には農民で占められている地域において、学芸がどのように浸透してくるだろうか。

手がかりとして河内からの都市への遊学者をみると、現在門人簿の残されている塾だけで計一六七人確認することができる。年代的には一七世紀末の京古義堂への入門から始まっているが、増加してくるのは一八世紀半ば以降であり、医塾入門者が多い(表5・6参照)。特に山脇家や吉益家などの古医方家(こいほうか) (観念的医学を排し、経験的実証的な医学を主張した)への入門が多く、なかでも紀州春林軒・中之島合水堂の華岡家へは合わせて二三名という最多を示している。

西村允藏 ところで農民が学問や医家を志すことは家や地域にとつてどのようなことを意味したのだろうか。石川郡北大伴村(現富田林市)の西村允藏・周助という二人の兄弟のことを素描してみたい。

在郷町富田林と大ヶ塚のほぼ中間にあたる辺に北大伴村がある。北大伴村は村高五八〇石余の天領の村であり、一八世紀後半には村の田畑の半分近くは稲作以外の商品作物が作られ、なかでも木綿が三五%以上を占める村であった。(天明四(一七八四)年、「諸作植付帳」。以下ことわらないかぎり西村家文書による)。宝曆七年(一七五七)の宗門改帳によると、当時の村の人口は四六八人、戸数は一一六戸であった。ところで、その宗門帳につきのような一家族が記載されている。

表5 河内よりの郡別遊学者数

郡	交野	石川	茨田	丹北	若江	志紀	丹南
人数	21	14	23	20	14	10	8
安宿	河内	澁河	古市	讚良	錦部	高安	合計
7	3	5	2	5	6	1	139

表6 河内からの塾別入門者数

塾種	塾(主)名	塾所在地	開塾期間	合計
儒	古義堂(仁齋・東涯)	京都堀川	1681~1736	15
儒	皆川淇園	京都	1759~1806	6
儒	咸宜園(広瀬淡窓)	九州日田	1801~1856	5
儒	広瀬旭荘	堺	1836~1847	11
儒	梅花社(篠崎小竹)	大坂	1814~1847	22
儒	洗心洞(大塩中斎)	大坂	1825~1837	8
儒	泊園書院(藤澤東咳)	大坂	1843~1859	16
医	山脇玄脩	京都	1678~1727	4
医	山脇東門	京都	1762~1782	2
医	吉益東洞	京都	1751~1773	6
医	吉益南涯	京都	1773~1806	3
医	山脇東海	京都	1782~1834	2
医	伊良子道牛(道牛以下四代)	京都	1697~1846	4
医	荻野元凱(三代)	京都	1764~1859	7
医	賀川有齋家	京都	1769~1875	6
医	春林軒(華岡青洲以下三代)	紀州	1788~1882	13
蘭医	芝蘭堂(大槻玄沢)	江戸	1789~18726	1
医	小森桃塙	京都	1801~1860	2
蘭医	海上随鷗	京都	1805~1810	1
医	百々俊徳(二代)	京都	1811~1886	9
医	水原三折	京都	1834~1855	2
医	合水堂(華岡準平以下二代)	大坂中之島	1806~1867	10
蘭医	適塾(緒方洪庵)	大坂中之島	1844~1863	2
医	時習堂(広瀬元恭)	京都	1844~1871	2
合計				151

高拾壺石壺斗六升五合

栄五郎 当丑九歳

弟竹之助 当丑七歳

母さち 当丑三二歳

妙意 当丑七一歳 是ハ先又兵衛伯母ニ而御座候

まかりこしきょうろう  
是ハ同村佐兵衛姉ニ而十式年以前縁付ニ罷越候

母と二人の兄弟を中心とした母子家族である。母さちは二〇歳で嫁し、二人の男子を生んだが、その後まもなく夫を亡くしたのである。その筆頭に記される栄五郎がのちの允蔵である。その家の持高は一・一六五石であり、富裕とはいえないが、階層分解の進んだこの村では上層に属し、村で一〇位ぐらいのところにある。

さてこの家族はその後どう変わったか。二七年の後になるが、持高記載のみられる天明四（一七八四）年の宗門帳をみるとつぎのようである。

高拾五石六升式合

周助 当辰三五歳

兄允蔵 当辰三七歳

母さち 当辰五九歳

下女とめ 当辰一八歳 北別井村善左衛門娘去卯二二月 当二二月迄壺ヶ年季召抱

妙意がなくなり、下女が雇われているほかに、一見、大した変化はないようである。栄五郎・竹之助兄弟はそれぞれ成人後、允蔵・周助という名に改められた。持高も二一石から一五石へと増えている。そして三人の母子を中心とした家族であることは変わっていない。しかし、変わっていないことはかえって特異ではなからうか。母さちはおそらく気丈貞潔な人で再婚もせず、苦勞して二人の男子を育て上げたのである。そしてこの兄弟はす

に三〇歳半ばであるが妻や子の記載がない。当時二人とも妻帯していないのである。さてとくに注意されるのは、兄と弟の記載順が入れ替わって、弟周助が戸主となっていることである。つまり、いつかの時点で、兄允蔵は弟へ家督を譲り、自身は「厄介」（戸主の傍系親族で被扶養者）の位置に退いているのである。これはこの間に兄允蔵において何か一身上の変化があったことを想定させる。このような家族構成における変化あるいは無変化は、なぜ生じたのであろうか。

その間の消息を語る史料はほとんど残されていないが、ただ一つ、允蔵の手になる明和五（一七六八）年九月から同七年にかけての日記がある（「日札」）。「九月」一二日、今日昼南半右衛門二而毛見帳（作物の出来柄を調べて書き上げたもの）仕立」（同）一三日、昼、南半右衛門二而毛見帳仕立終。初霜。昼七ツ時大ケつか大念寺往生」と、この年二一歳の允蔵は、その冒頭から若き村役人の姿を示して現れてくる。この家は代々村役人の家柄であったようだが、允蔵も早くから見習いはじめたようで、以後の日記もほとんど連日、村に関する記事で埋められている。ただし、たまに次のような特異な記事が散見する。たとえば明和六年七月五日、

五日 寅刻（午前四時ころ） 左兵衛と大坂へ行く。四ツ時前（午前一〇時ころ）心斎橋泉屋へ参る。寿世保元七匁五分、本草備要五匁六分、尺牘奇賞七匁貳分、代銀二〇匁五分。

とみえる。心斎橋は当時日本で最も代表的な本屋の街であった。允蔵らはそこで本を買うために日帰り歩いて行ったのである。買った書物は、農民の買う書物としてはかなり高価である。その他にも『尺牘活套』『古文（真宝）評林』などを購入している。これらの書物は実用的性格のものもあるが、どちらかといえば漢文素養を高めるための書である。こういう志向を允蔵はもちつつあったのである。

隣村南大伴村の円照寺で行われていた素読や講釈にも出席したらしく、明和六年七月「廿日、午時（正午ころ）より円照寺において孟子御読」「廿一日告子（『孟子』の一篇）上篇御読」などという記事もみえる。允蔵は二〇歳前半にすでに強い知的欲求をもつようになっていたのである。そして書籍を貸借したり筆写しあったりする好学的

なグループがすでにこの地域に形成されていたと思われる。

允蔵の家には江戸期の本が多く残されているが、そのなかに皆川淇園の著が数点存在する。淇園の著は高度難解で知られる。そのような書を学んだ農民がいたことは一つの驚きであった。その皆川淇園の門人簿〔有斐斎受業門人帖〕を見ると、つぎの記載に出会うことができた。

河内国石川郡北大伴人

同（昭和九年） 西村允蔵 可久 字子徳年廿五歳

紹介梁田述 執事淡輪秉

明和九年（＝安永元（一七七二）年、允蔵は淇園塾へ入門したのである。皆川淇園（一七三四～一八〇七）は、京都の儒学者で、漢語の字義の精緻な解明を通して、「物」の意味を新たにとらえ直そうとして、「開物学」とよばれる独自の学問思想を築いた人である。その門人簿には一一一三人の門人がのるが、実数三千余人と称されるほど当時名高い大儒であった。しかもその門人は全国を網羅しており、その門からはのち著名になった人物を多く輩出した。この塾は一定の学力素養を積んだもの行く高度な内容のものである。河内の一農民である允蔵はこの塾へ入門したのである。しかも門人簿の二九五番目という比較的早い時期であり、また農民の入門はきわめてまれであった。

允蔵は何を目的で淇園塾に入門したのか。儒学者になるためかという実はそのようではない。允蔵の家には允蔵の京遊中の写本がいくつか残されている。その中に、山脇塾や賀川塾で写したと記す奥書をもつものがある。山脇塾は当時でいえば山脇東門の医学塾である。はたして山脇家門人帳をみると、明和九年七月朔日入門として明記されている。この山脇塾では、その先代山脇東洋が宝暦四年（一七五四）に日本ではじめて公に刑死死体を解剖して人体の内部観察を行い、従来の観念的医学を排して、観察経験に基づく実証的医学を主唱していた著名な医塾であっ

た。また賀川塾も近世産科学において一画期をなした医塾であった。

すなわち允蔵は医家を志したのである。そのために淇園塾で儒学を学ぼうとしたのであった。当時の医学は儒学の知識を不可欠の前提としていたからである。河内の一農民がこのような当時一流の塾に入門しようとするには、並々ならぬ決意がこめられていたとみなければならぬ。この決意は一方で、農民として家をついでゆくことを捨てることでもあった。このことは允蔵自身にとつてだけでなく、家にとつて母にとつて大問題であったはずである。しかし母は、允蔵の資質を察してそれを許したのである。そしてその際、家督は弟周助に移譲されたと思われる。允蔵は三、四年間の京都遊学を終え、郷里南河内へ帰った。允蔵はこうして農民から医家へ変身し、地域における医療活動に従事するようになる。それは京都に起こったばかりの新しい実証的医学をこの地域へもたらすことにもなったであろう。はじめの宗門改帳の変化の背後には、このような兄允蔵の変貌が隠されていたのである。

**西村周助** さて一方、家督を譲られた弟周助はどうであったか。周助は母を支えて兄允蔵の分をも働かねばならなかったわけである。実は允蔵が遊学し医家になりつつあったころ、この村は村入用をめぐる混乱が続けており、一〇年ほどの間に庄屋一〇人ばかりも交替するというまことに不安定な村政が続いていたのであった。そこへ追打ちをかけるように天明の飢饉に直面し、米価騰貴によって村民の生活は切迫したものとなっていた。周助はちょうどそういう最中、天明三年（一七八三）に三四歳の若さで庄屋に推されたのである。

周助は村の立直しを図るため、今までの伝統的生活習慣を改めて、新しい独自の方法をとった。まず周助は、上層農民に働きかけ、これからさき五、七ヶ年間の年忌仏事などの費用を、先に済ませたこととして積立てさせ、それを困窮者へ施すよう取計らい、同時に村内の冠婚葬祭などの振舞を制限し、その制限した分を出銀して村入用に加えることで、困窮者の負担を軽くしようとした。これらの費用こそは、村の伝統的生活で最も出費のかさむものであったからである。また周助は困窮者たちの借銀について銀主と利下げ交渉を行い、あるいは自分で低利の借銀をし、それを無利息で貸し与えて、高利の借銀を返済させるといふような犠牲的努力をも行ったのである。このよ



うに目前の窮状を救うとともに、生産増強による生活安定のために、とくに用水と肥料の安定確保に意を用いた。早魃のさい、当時の村々ではすぐ雨乞神事を行うのが常であった。村民たちが周助に当村でも行いたいと申し出たのに対し、周助は「成るべくたけ人力を尽くし、力に及ばざる節、神仏へ祈り申さず候ては天命に叶い申さず候」と答えたという。一見、当然のことのようであるが、自然を人力をこえたものとみなし、呪術的な依存に陥りやすい当時の村民に対し、それをできるだけ人間の努力の問題におきなおそうとしたのである。

このような周助の働きは、単に庄屋としての献身的努力というだけではなく、村民に対して生活意識の変革を迫るものが含まれていたといえる。

このような周助の努力によって村は立ち直ることができた。周助の退役希望にもかかわらず、村民たちは彼を庄屋に推しつづけた。

享和元（一八〇一）年、この周助の功績は代官を通して幕府老中の耳に達した。審議の上、周助は表彰されることとなった。銀一〇枚を与えられるとともに、その身一代の帯刀御免および永代苗字を名づけることが許されるといふ光榮に浴するのである（『内閣文庫『続編孝義録』』。これは庶民表彰としては、最高クラスの褒賞内容であった。周助五二歳のときである。ただし、兄允藏はこの周助の影ですでに亡くなっていたらしい。同村の学友三島政敬は「西村氏の身まかりて」と題して「濁にもしまぬはちすの花なればうき世の中もはやく過にき 政敬」（西村家蔵短冊）と追悼歌を残している。なお、かれらが独身であったのは、母へ孝をつくすためであったことが記録には書き添えられている。

允藏と周助と、この二人の兄弟は陰陽あい異なる道を歩んだが、それぞれ医業と村落指導において地域の生活文化に、伝統的な生活意識から自由な、合理的で進取な精神の息吹きを注ぎこもうとしたのではないだろうか。

## 2 竹島浩庵と華岡流医学の普及

竹島家の人々 次にもう一例、河内の医家として広汎な活動を示した竹島浩庵と、その息子二人が華岡家に入門し、華岡医学を普及させた竹島家の動向についてみておきたい。

医家としての竹島家の祖は竹島憲庵（名重成、号憲庵、称藤馬）であるが、憲庵は享保元（一七一六）年京の古医方の主唱者後藤良山（よしの）に入門して医学を身につけ、また大坂の学問所懷徳堂の設立期の門人でもあった。竹島家の初代憲庵がこのように医学と儒学において、従来の閉鎖的で観念的な学問の在り方を批判し、庶民へ開放された学問潮流に加わる人であったということは注目しておくべきであろう。

憲庵は大坂で活動したが（一七四二年没、六七歳、生玉、齡延寺）、後を継いだのはその弟子であった竹島復庵である。この復庵は、宝暦四（一七五四）年河内国丹北郡川辺村へ移住する。平野から河内へ向かう古市街道の、大和川を渡る手前の地で、往来繁多なところであった。何らかの事情があったものと思われるが、都市の医家から在村での医療普及を志向したのである。復庵はその居を「慎独堂」と名づけて医療活動を行い、また周辺の人々に医学教育を行った。「産前あたため薬」「産後血おさめ薬」のチラシや「解毒膏」の効能書きなどが見られる。この復庵もまた当然ながら後藤良山を仰ぐ古医方の信奉者であった。「五運六氣説」（陰陽五行説による医学）を批判した文章の中で、医学における「運氣」の論は、「曆家の余波、陰陽家の贅言」で治病に関して無益と断じ、古医方の古典『傷寒論』や良山の医説を称揚し、「正語を選んでこれを試みる」親試実験主義を主張している。天明五（一七八五）年、七〇歳の祝賀の記録『慎独堂寿詩集』には京の江村北海をはじめ近くの医家文人北山橘庵らの寿詩とともに一〇名ほどの弟子たちの詩も収められている。川辺で医家として自立するとともに地域の学芸興隆に資するところがあった。

この復庵は晩年、富田林に居を移した。長男浩庵の妻が富田林の名家倉内氏であり、そこが在郷町として発展し

ていたからであろう。浩庵は医学を父復庵に学ぶほか誰についたかははっきりしないが、青年時には大坂混沌社の頼春水や尾藤二洲にも師事した。浩庵はこの地で活発な医療活動を行っており、富田林の杉山家の主治医的な位置を占めるにいたっている。同時にその活動は医療ばかりでなく、学芸交流においてとくに著しく、残される浩庵の詩集『集義斎詩稿』には北山橘庵（松原一津屋）、上田友謙（道明寺）、柘植中務（柏原国分）、篠原希亮（平野含翠堂）、平田竹軒（野村、白鷗吟社）、桑野喜庵（大田）など、在村の学芸家たちとの豊かな交流がうかがわれ、浩庵は在村学芸ネットワークの中心であった。

寛政五（一七九三）年正月、父復庵が没した。浩庵はその葬儀を儒教式で執り行った。位牌も儒教祭祀における神主が用いられた。これは周囲からは異様ともみられる思い切った行為であった。浩庵は医業を新たに継ぐものとしての自覚を儒教に求めたのである。それは儒教を教養や道徳としてではなく、祖先祭祀をとおして祖先と自己の生命の連続性を願う宗教として捉えなおし、医家としての新たな家のはじまりを憲庵に置き、自らをその連続性の中に位置づけることを意味した。医家としての自分と家の歴史を一体のものとして捉えなおそうとしたのである。これは医家＝儒家であることの独自で先鋭な表明でもあった。

隼人と真人 浩庵は享和二（一八〇二）年、紀州へ旅し、華岡青洲と出会った。青洲塾のちの春林軒は紀州国那賀郡名手平山という紀ノ川沿いの今でも辺鄙なところにあった。青洲もやはり在村医家のひとりであった。青洲はまだこのとき麻酔薬による外科手術を完成するには至っていないが、浩庵は青洲の新たな医療への志に心動かされたようである。帰国後直ちに長男隼人（一八歳）を青洲に入門させた。そうしてその後再び川辺に戻り居を定める。

隼人の春林軒在塾は九年にわたったという。青洲が麻酔手術に成功するのは文化元（一八〇四）年であり、その名が知られ、門人が増えてくるのもそれ以降である。したがって隼人が入門したころは青洲苦心の時期であり、門人も年に一人か二人という時期であった。隼人はその間、青洲が麻酔薬を試み、乳がん摘出をはじめとする麻酔手

術に成功していく過程に現場で接したのである。隼人はそこで多くを学んだ。「丸散膏方考」「外科正宗筆記」「乳癌發揮」「青洲先生治験録」等、「青洲口授」とされる筆記本が多く残されている。塾を終えるにあたって青洲が書いて与えたと見られる書がいくつかあるが、そのなかに「守静館しよせいかん」と題したものがあつた。すなわち隼人は川辺に帰り、竹島鳳庵と名乗って医院「守静館」を営むことになるのである。

一方、一二歳年少の弟真人は文化一三（一八一六）年、華岡家の大坂分塾として青洲の弟華岡良平（鹿城）が中之島に開いていた合水堂へ入門した。そしてその修業後は川辺に帰らず、交野郡野村（現枚方市）に医業を開き、倉内樟庵と名乗って、医院「折肱堂せつこくどう」を開設した。こうして二人は東高野街道でつながる河内の南北に分かれながら、ともに華岡流医学を普及することになった。「守静館」の薬袋には「華岡製」と刷られ、「折肱堂」の瓦当には「花」の一字が刻されており、「華岡さん」と呼ばれることさえあつたという。

**竹島家の役割** 父浩庵は文化一四（一八一七）年、医業を息子たちに譲つた後、諸国漫遊に出立した。淡路島から四国に渡り、阿波・讃岐そして備前・備中・備後・安芸、さらに播州から丹後方面へと回っている。各地の諸学者を訪ね、詩や書画を揮毫してもらうとともに、地方の学者たちが見出した「奇方」の調査を行っている。「奇方」とは伝統的な薬の処方に対して、新たに経験的に見出された効果ある薬方をいう。その記録が『漫遊采芳帖』であり『漫遊奇方録』である。浩庵には都市の名家や書物的知識に依頼せず、現地に赴き、その人に会い、そこから新たな知を得ようとする姿勢が顕著である。それはおのずと「奇方」と「奇士」を見出すということになった。青洲のように都市の医家を越えるような地方医家たちの医療努力が実感されていたからであろう。

竹島家ではその後、鳳庵の子文平が医業を継ぐべく一五歳で大坂合水堂に入門して華岡医学を学び、かたわら春日寛平から内科を、賀川秀哲から産科を学んだ。安政五（一八五八）年、父の後をついで開業し、明治に入ってから兵庫県医学校に入つて西洋医学を修得し、種痘免許医師として河内中南部における種痘普及に尽力した。

こうして憲庵から始まつた医家としての竹島家は、後藤艮山という経験主義的医学の流れを汲み、在村医家を志

向し、地域的移動を行いながら地域学芸の交流をつくりだすとともに、地方の医家や「奇方」に目を向け、華岡青洲の医学を摂取するに及んで定着した医療活動を展開するにいたった。特に地域の華岡家人門者の多くが竹島家を媒介して入門した点でも、その果たした役割は大きい。

### 3 在村知識人の結合

北山橋庵 さて医家たちの多くは単に医療技術者として存在するだけでなく、儒と医を中心とする教養人でもあった。なかにはむしろ儒者としての意識をもちながら、医としての家業の維持や地域の医療条件に要請されて、医としての存在形態をとる者も多かった。その意味でも、このような医家の存在は医療だけではなく、学芸教育条件としても重要な意義を帯びていた。

ところでこれらの医家は、独自の医療を通して特定の地域社会と関わりながらも、個々に分散していたわけではない。医療や学芸の面においても一定の結びつきをもって活動していた。その基本的な形態は結社であった。あるいは何々会と称する定期的及び不定期の集まりであった。そしてその会合の場として各自の自宅の一部を「一堂」、「一亭」、「一館」と称するような学芸サロンとして開放し、学芸交流の場としていったのである。

そのような意味で河内の農村地帯に学芸の新たな息吹が流れこんでくるのは一八世紀後半である。とくにその中南部の農村において学芸普及の起点となったのは、丹北郡一津屋（現松原市）の医家文人北山橋庵（一七三一〜九一）の存在である。橋庵は明和二（一七六五）年に結成された大坂の学芸結社混沌詩社の重要な一員であった。橋庵は『橋庵詩鈔』（寛政元年、一七八九刊）その他によれば明和三年ころすでに混沌社の人々と会しており、明和四・五年からは混沌社の人々が夏を中心に避暑を兼ねて橋庵宅（観願堂）を訪問するようになっていた。観願堂は混沌社にとって河内支部のような観をもつこととなる。さらにそこへ京の江村北海や龍草蘆（りゅうそうろう）も加わり、盛んな詩文

活動が展開された。

このことは混沌社の活動の地域的広がりを見る上で重要だが、当該地域から見れば、これは単に都市学芸の流入ということだけではなく、この地域で学芸への志向を抱きながら、機会の得られなかった者たちに刺激を与え、彼らを橘庵の下へ引き寄せていくこととなった。『有菜集』（安永九（一七八〇）年）は橘庵の五〇歳を祝って諸家の寄せた寿詩を門人たちが編集して刊行されたものである。混沌社の人々を中心に合わせて八六名からの寿詩がみえ、その内「門生」として載るのは表の二七名であるが、その大半は河内の門下であることが知られる。活動の場をもたなかった在村の学芸家たちが、橘庵の下に結集して一定のグループを形成するに至ったことが、うかがわれるのである。荒木明徴の序文には「田間に僻任」しながらも、「餘力学文」に志す者多いとのべる。頼春水の『在津紀事』にも「元章（橘庵）の徒弟日に盛にして、家道年さかに隆なり」と記されている。

学芸結社とサロン 重要なことは、こういう場が形成されたことをきっかけに、互いに地域における同志の存在

表7 『有菜集』にみえる門下

	氏名	居住
○	荒木定保(明徴)	古市
○△	白井元常(恒)	波川
	竹田清記(編)	堺
	條實主(公差)	〃
○	积鳳琴(調)	丹南
○	积黙巖(教)	志紀
○	中野弘美(隆)	〃
○	积典常(師準)	〃
○△	小野孔章(意)	丹北
○	吉村真卿(光保)	〃
○	松永幸進(貞雄)	〃
○△	松永継美(公亮)	〃
○	积巖護(法城)	〃
○	平子業(潤)	八上
○	雑下元儒(尚興)	
○	井達夫(公礼)	
	清水元徴(通)	長崎
	里元粲(彩)	堺
	渡辺元圭(珪)	大坂
○	黒田叔栗(寛)	小山
○	野上子祥(公禎)	丹南
	赤松元亮(則明)	因幡
○	長崎子護(興邦)	波川
○	舟木伯裳(璋)	瓜破
○	荒木元民(俊)	古市
	難波君章(成)	備前
△	合長弥(達)	大坂

○印は河内門下

△印は筆録・校訂省

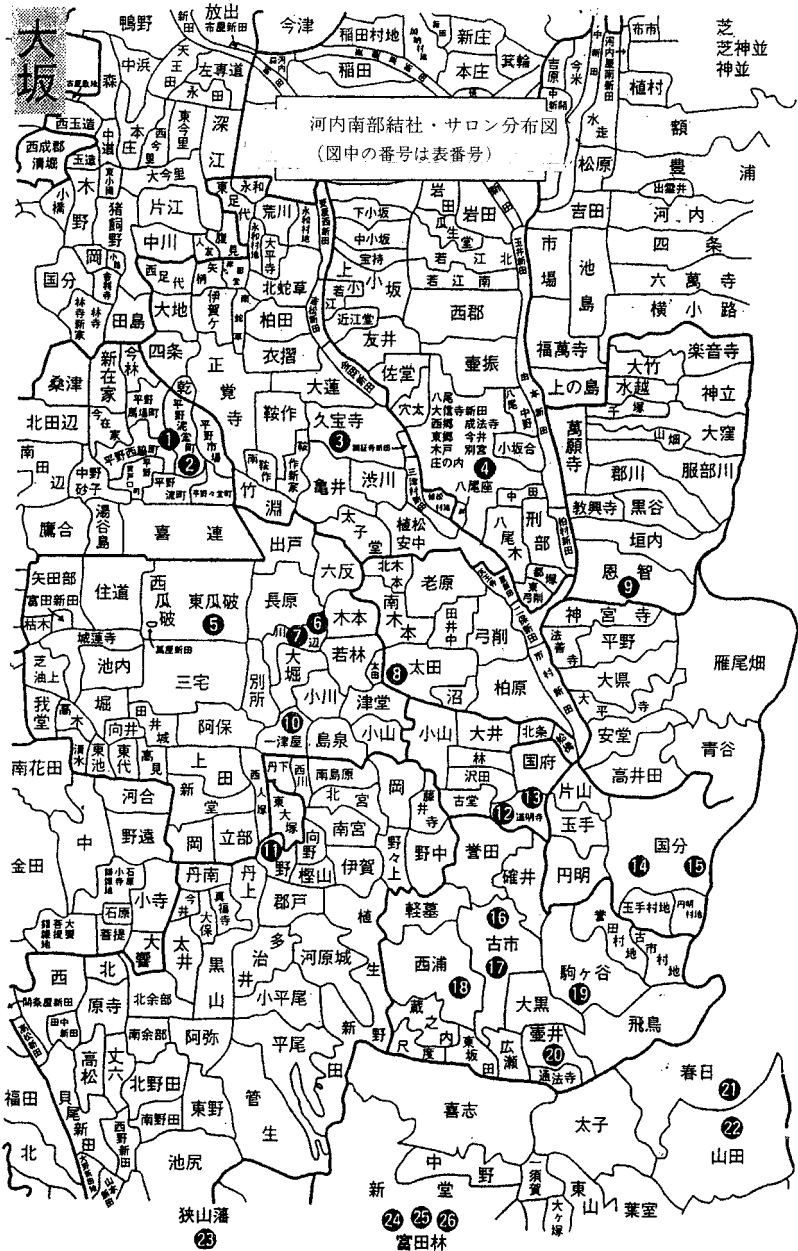


表8 竹島浩庵詩稿にみえる学芸結社とサロン

名称	所在	主宰者	家業
①含翠堂	平野	篠原希亮	儒
②松齡軒	同	奥野氏	医
③迎翠亭	久宝寺	安田春益	医
④弥性園	八尾	田中元絹	医
⑤	瓜破	舟木伯裳	医
⑥慎独堂	川辺のち富田林	竹島復庵	医
⑦守静館	同	竹島鳳庵	医
⑧	大田	桑野喜庵・喜斎	医
⑨折肱館	恩知	柘植龍洲	医
⑩観頤堂	一津屋	北山橘庵	詩・医
⑪白鷗吟社	野村	平田竹軒・梅軒	医
⑫古梅堂	道明寺	上田友賢	医
⑬楽只居	同	上田友庵	医
⑭先天堂	国分	柘植龍洲	医
⑮立教館	同	柘植葛城	医
⑯松風亭	古市	乾見竜	医
⑰	同	江見将監	医
⑱	西浦	愛石	医
⑲臨川亭	駒ヶ谷	篠置易庵	易
⑳香爐館	壺井	多田氏	神官カ
㉑善論堂	春日	吉田子玄	儒
㉒三缸亭	山田	田中伯真(伊左衛門)	豪農
㉓楽山亭	狭山	狭山藩邸中	士
㉔幽皇詩社	富田林のち川辺	竹島浩庵	医
折肱社			
集義齋			
㉕縹紗樓	同	河村家	商
㉖金河亭	同	永田家	医
㉗墨池軒	不明	山中氏	不明
㉘餐霞亭	〃	天野氏	〃
㉙適翠軒	〃	不明	〃
㉚石川亭	〃	〃	〃

を見出し、そこに学芸を媒介とする新たな地域的結びつきが形成されていったことである。すなわち在村結社の形成である。あるいは結社とまでいえなくとも、各人の宅が寄り集まる場として「一亭」や「一樓」というようなサロン名をもって表されるようになる。これは、人々が介して学芸を語り、詩文を作り合う場として意識的に形成されてきたものといえる。

一八世紀後半から一九世紀前半にかけて、河内の中南部の農村にどのような結社やサロンが形成されていたのか。



24 25 26  
富田林

狭山藩  
23

先述したように、富田林を中心に活発な学芸活動を行った医家文人竹島浩庵（一七五四―一八二六）の詩文稿『集義斎詩稿』にみられる場を一資料として図表化しておきたい（表8・分布図参照）。これは浩庵が交流した人と場であり、しかも残される詩文稿はその一部でしかない。実際にはもっと多くの場が形成されていたと思われる。しかしこれだけでもこの地域に相当なサロンや結社が存在したことがうかがわれよう。なおここには挙げていないが、周辺二〇余の寺院がやはり集会の場になっていた。

この詩文稿にみえる人々は河内中南部の人々だけで六〇人前後にのぼっている。今、その一人ひとりについてはふれないが、これらの人々は決して個別分散していたわけではなく、互いに頻繁に往き来しながら、学芸交流を行っていたのであり、この地域一帯にこういう結社やサロンを核とした在村文化人たちの結びつきが形成されていたのである。その有様は、いわば在村文化人社会の成立ともいえよう。

#### 4 白鷗吟社の結成

平田竹軒と白鷗吟社 さて、在村の学芸結社・サロンのなかで最も代表的なものともみなされるのは丹南郡野村（現羽曳野市）の平田竹軒（明和二（一七六五）年―文政三（一八二〇）年、名履信・字子順・通称周次）が中心となって結成された白鷗吟社である。白鷗吟社は「我が南河文運の盛、この時を以て最となす」（松尾香章『河内名流伝』明治二七年刊）と評されている。しかしすでにこの明治中期には「惜しいかな、事蹟伝わらず」と記される状況であった。したがってまことに断片的なことしか知ることができないのであるが、地域学芸の展開にとって重要な位置を占めると考えられる。

竹軒の家は医家であった。竹島浩庵の父復庵の七〇歳を祝って諸家が寄せた寿詩集『慎独堂寿詩』（天明五（一七八五）年）に野村の「履信」という竹軒と同名同村の人が寿詩を寄せ、復庵を「先生」と称している。これが竹軒

その人であれば青年時に竹島復庵に医学を学んだことになる。この『慎独堂寿詞』には北山橋庵・江村北海のような名の知られた人の賀詩もみえるが、他に復庵を「先生」とよんでいるものが一〇名みえ、その中には舟木伯裳や桑野喜庵など地域の学芸を担うべき人々もみえる。竹軒も早くからそういう学芸の交遊をもっていた可能性は高い。

竹軒はしかしのち京に遊学したらしい。竹島浩庵の詩稿に「平田周治の平安にゆくを送る」と題した七律があり、その中で「笈を負いて師を尋ぬ」とある。それがだれであるかは知られない。竹島浩庵はまた、平田竹軒を詩会の席に連れて行ったりした。「中秋、諸子と同じくして、田中胤隆宅に集まり、月を賞す。席上、平田子順に贈る」と題する七律がある。その中で「騷客」（詩人のこと）が風光をめながら、酒を酌みかわし、ときに「劇談」に陥ったりするなかで、何人かの者は詩を賦したが、なかでも竹軒のよんだ「莊篇」に心動かされたという。竹軒はおそらく詩に志すところがあったのであろう。竹軒は浩庵より一歳年下で、交友の広い浩庵に従って、地域に登場してきたいろいろな学芸家たちの集まる場に参加していたのである。浩庵は江村北海や北山橋庵などもすでに交流をもち、またその活動性をもって河内の在村学芸家たちの結びつきを媒介する役割を果たしていた。竹軒にとって先輩は浩庵に限らなかつただろうが、浩庵はその重要な一人であったといえるだろう。

**白鷗吟社の結成** 白鷗吟社はそういうなかで、周辺地域の学芸人たちを結集し、地域内部から文運をおこしていくこうとするものであった。その結成がいつのことであったかははっきりしないが、地域学芸の最初の結集者北山橋庵の死（寛政三（一七九一）年）のち、その分散をとどめ、地域自生の運動として再結集しようとしたものと考えられる。おそらく寛政・文化期のことであろう。「月毎二その邸に会集する兩次」（稿本『河内人物志』明治前年成）といわれており、竹軒宅に月二回集まったようである。ここに集まったのはどういう人々であったのだろうか。今、伝えられているのは次のような人々である（表9参照）。

さて、先述したようにこの白鷗吟社についての史料は散佚しており、今、その運営の実態を知ることができない。

そこでこの社に関係した二・三の人を通して結社の性格をうかがうことにしよう。

画僧愛石 この白鷗吟社に関係した人で、やや特異な位置を占めた人に西浦（現羽曳野市）の宝寿寺に來住した画僧愛石がいる。愛石は温雅でのびやかな池大雅風の南画をよくした人で、その作品は現在も美術館の展示や旧家蔵幅中にも見出されることがある。文化四（一八〇七）年の『浪華画人組合三幅対』に「大雅二世」として掲出されるのをはじめとして、文政六（一八二三）年の『続浪華郷友録』『浪華金欄集』や文政七年の『新刻浪華人物誌』などに登載されており、当時は相当に名の知られた画家であった。しかしその伝記については、ほとんど不明である。出身についても紀州とするのが一般だが、京都説もある。いつごろ西浦宝寿寺に來住したのかについても確証はない。「大雅二世」とされるが画をだれに学んだのかも実のところはつきりしない。池大雅は安永五（一七七六）年に没しているので、化政期を中心に活躍した愛石とは年齢のずれが大きく直接の師弟関係を想定することはできない。なお『河内人物誌』は紀州出身とし、画を野呂介石に学んだとする。

しかし、一八〇〇年前後の大坂には池大雅門下の福原五岳や木村兼葭堂など、その画系に連なる画家たちがいた。かれらの影響をうけた可能性が考えられる。とくに愛石の「箕面瀧図」は画面構成や「箕山瀑布」の字体が大雅や兼葭堂の同名の作品に酷似していて、愛石の属した画系をうかがわせる。これに関係して注目されるのは、『兼葭堂日記』の寛政八（一七九六）年から享和元（一八〇一）年にかけて「愛石」および「松井愛石」という名がしばしば見出されることである。しかし、それが果たして画僧愛石その人であるのかどうか問題であろう。「愛石」はこの間、二六回も兼葭堂を訪問しており、非常に親密な関係にある人であった。その内、享和元（一八〇一）年一月十一日の記事はとくに注目される。すなわち「三人、河州野村平田周二・古市江見将監、愛石同伴、駒ヶ谷篠置易庵四人來」という記事である。「平田周二」は平田竹軒、「江見将監」は古市の医師、その二人を「愛石」が伴い、さらに駒ヶ谷の医家篠置易庵（しのぎやすあき）が加わり、四人來訪したという記事である。この「愛石」はその同伴者との関係からみて、西浦宝寿寺の画僧愛石であることはまちがいない。この記事の上欄には「愛石、河州医生三人同伴」と頭書

されており、兼葭堂にとつて愛石はすでに親しい人であることがその書き方で示されている。なお「松井愛石」については確証が得られないが、二〇回の訪問回数が見え、さらにその期間が「愛石」とまったく重なっている点、同一人である可能性は高い。ともあれ、愛石は寛政八年から享和元年まで六年間にわたり、兼葭堂と親密な交流をもっていた人であることが確かめられるのである。おそらく愛石はこの期間に兼葭堂を通して池大雅を学びとり、さらに自らの画風を確立していったのではないだろうか。

白鷗吟社と愛石 白鷗吟社との関係で注意されることは、愛石はこの享和元年の時点で、すでに平田竹軒・江見将監・篠置易庵らと親しかったことである。そしてかれらがこのように同伴して兼葭堂を訪問していることは、この年にはすでに白鷗吟社は成立していたか、あるいはその母胎となる結びつきが形成されていたことを示している。愛石もすでにこのとき西浦に来住していたのである。愛石の名がこの年以降、『兼葭堂日記』にみえないのは、おそらくこの年、西浦に来住するようになったことと、兼葭堂がその翌年、享和二年に没したからである。

愛石は来住するや、直ちにその地域の学芸愛好者たちと交流を持つようになり、かれらを兼葭堂という博物学者にして画家、奇物収集家にして大蔵書家、当時全国で最も著名な町人学者にひきあわせるという役割をも果たした。白鷗吟社という新たな学芸結社を形成しつつある竹軒たちにとつて、これは大きな励ましとなるものであった。

愛石はこうして白鷗吟社に加わる河内の詩人画家として文化・文政期には広く知られるようになり、彼に画を学ぶものも多かった。高田秋斎（前掲表）・篠置易庵（後述）・大谷品崑（法善寺村、安政二年没、六五歳）・中村四端（豊浦村庄屋、歌人、また俳号来耜、弘化三年没、九五歳耜）・服部仏蓮（渋川郡植松村、松林寺住職、明治六年没、六〇歳）、吉村撫松（丹北郡泉村館林藩領大庄屋、一七九九〜一八六九）らは愛石に画を学んだという。

なお、この愛石は生年も不明とされていたが、竹島浩庵の別の詩稿の文化一〇（一八一三）年の詩の中に、「寿愛石禅師五旬誕辰」と題する詩がある。すなわち愛石は明和元（一七六四）年生まれであったことが知られる。

しかし愛石はその死去に関しても一つの謎を残している。というのも「後、大坂二出テ某寺二住シ、大塩後素



表9 白鷗吟社関係者一覽

氏名	郡名	村名	職業	生	没	学	歴	名・字・号・通称
平田竹軒	丹南郡	野村	医	一七六五	一八二〇			名履信・字子順・称周次
平田梅軒	同	同	医	一七九〇	一八三八			称瓊藏・号植生山人
竹島浩庵	丹北郡	川辺	医	一七五四	一八二六			
麻野林叟	志紀郡	林	庄屋	一七九一	一八五一	平田竹軒・篠崎小竹門		名正脩・字子業・称猪三太
柘植龍洲	安宿郡	国府	医	一七七〇	一八二〇	懐徳堂・浅井凶南		名常彰・字叔順・号龍洲・称中務
柘植葛城	同	同	医	一八〇四	一八八〇	懐徳堂・頼山陽・小石元瑞		名常熙・字君績・称卓馬
上田友格	志紀郡	道明寺	医	一七三八	一八〇六	龍草庵		古梅堂
上田友賢	同	同	医	一七九一	一八五八	懐徳堂門下		名希貞・字守貞
上田雍洲	同	同	医	一八二五	一八九三	奥野小山・華岡準平		名厚・字配夫・号石水
津守德基	同	国府	歌人	一七九五	一八七二	住吉社家津守氏		
東尾勝次郎	同	林	農			後藤松陰・伴林光平		名載・字子厚・号杏陰
篠置易庵	古市郡	駒ヶ谷	医	一七六六	一八五二	京医後藤栗庵		名文豹・字子豹
僧 愛石	同	西浦宝寿寺	画家	一七六四		木村兼霞堂		
西尾兵右衛門	安宿郡	国分	庄屋			篠崎小竹門		
高田秋斎	志紀郡	弓削	医	一七五九	一八一二			
小山千斎	安宿郡	大懸	農					名有親・号千斎・称源左衛門
伴林光平	志紀郡	林	国学者 歌人	一八一三	一八六四	平田竹軒・飯田秀確 伴信友		

備考 稿本『河内人物誌』(明治前半成、松尾香章『河内名流伝』(明治二十七刊)、土橋真吉『河内先哲伝』(昭十七刊)による。

(大塩平八郎) ト友トシ善シ、天保元年、事ニ坐シ、疑ヲ蒙リ、獄ニ投ゼラレテ病テ寂ス」(『稿本河内人物誌』)と伝えられているからである。『河内名流伝』もこの内容を「天保初年」と変えただけでそのまま漢文体で記している。文政七年の『続浪華郷友録』には愛石の住所はまだ西浦宝寿寺となっているので、再度の大坂在住はそれより後のことであつたかと思われる。

大塩平八郎と交友関係をもつたということは、同時代の知識人同士としてありえたかもしれない。しかし「天保元年」(二八三〇)の「事」とは何であろうか。大塩の乱は天保八年である。あるいはそれを誤って記したものでらうか。しかし大塩の乱の関係者として捕縛あるいは取調べをうけた八七九人の中には見出すことができない。それではやはり「天保元年」の別の事件なのであろうか。「獄ニ投ゼラレテ病テ寂ス」というのは気になることではあるが、今は不明とするよりほかない。他所から来て、白鷗吟社の人々を引き立て、自らも画家として活躍しながら、何らかの悲運に見舞われて没した愛石という人は、その行動と存在が他の人々と比べて独自であり、気概を潜めた文人精神の持ち主であつたように思われる。白鷗吟社にとっては、在村の学芸家たちが、単に仲間の寄り集まりとしてではなく、同志としての自覚的結びつきをもった結社を形成してゆくためには愛石のような外から刺激を与える媒介者が必要であつたともいえよう。愛石はそういう触媒的役割を担つたのではないだろうか。

篠置易庵 愛石が兼葭堂の所へ同伴した一人に篠置易庵がいた。易庵は駒ヶ谷(こまがたに)の医者の家の生まれである(明和五(一七六八)年生。四歳のとき父を喪い、母の手で育てられた。母は易庵を育てるのに「資産アレトモコレナキガ如クニ粧よそおヒ、自ラ手製ノ綿服ヲ着シ」「自ラ犁鋤ヲ手ニシテ出テ、田畝ヲ耕ス」というような人であつたらしい。易庵一四、五歳の時、京坂に遊学したいといつたが、母は「先人タゞ一子、我、汝ノ遠遊ヲ欲セズ」といつて許さなかつたという。のち易庵は大和の長谷寺の僧の下に「遊学」したいと申し出て、今度は許されたが、駒ヶ谷からは約七里の距離があり、途中、竹内峠を越えねばならない。易庵は早朝に起き、家事を勤めて、昼食が終わると軽装して書を懐にし、長谷寺まで行き、一宿して聴講・読書を行い、翌日昼に立出して家に帰るといふ苦難の通学を

五年続けたという。そうして二一歳になって母を親族に託し、京の医家後藤栗庵に従学すること三年、ようやく業成つて、帰郷し、医家として立つことを得たという（『稿本河内人物誌』）。

このように伝えられる易庵は勤勉で孝行な村医者の子弟という趣が強い。たしかにそうであつたにちがいない。またそうであることを前提に白鷗吟社に加わる人でもあつただらう。吟社は家事や家業を放擲して詩文に遊ぶ場であつたのではない。あの町人学者兼葭堂も二九歳のとき、兼葭堂会という結社の運営に関わつて「家事は固より廃せざる所、上は父祖を奉じ、下は子孫に遺す」（『草堂課条』）とのべ、学芸によつて家業を陥さないことを堅く決心するところがあつた。兼葭堂が、来訪した平田竹軒や篠置易庵らにそのようなことを語つたということもありえよう。

白鷗吟社のあつた野村の隣村、郡戸村の庄屋小池家の「遺書」には「第一曲礼、第二手習、第三学文、此三芸は人倫の通術、士農工商ともに一も闕べからず」とのべられ、とくに「学文」は「我道」の「本」を自覚し、「今日何故渡世するといふ事をしらしむ」ものと位置づけられていた。学芸を中心に形成された結社も自らの生活、そしてそれとともに成り立つ地域の人々の生活と切り離されては存立の意義を失うであらう。篠置易庵は「貧家二病ム者アルヲ聞ク、其遠近ヲ問ハズ、直ニ行キテ之ヲ訪ヒ、薬ヲ与ヘテ帰ル、又貧生苦学スルモノ有ヲ聞ケバ、喜ンデ資ヲ給シ、又蔵書ヲ貸与シ以テ其業ヲ励マシム」という人であつた。「其業ヲ励マシム」るような力を引き出すこと、それは「何故渡世する」という問いとも結びついたものであらう。おそらく白鷗吟社の活動はそのような問題と関わりながら展開し、そのことによつて深く広い波及をもたらししたものと思われる。

伴林光平 平田兄弟や篠置易庵ははじめこの地域の人々と深い関わりをもつて前半生を過ごした人に伴林光平（文化一〇（一八一三）〜元治元（一八六四）年）がいる。光平は国学者・幕末歌人として、そして何よりも天誅組に参謀兼記録方として参加し、捕えられて京都獄中で斬死に処せられた人として知られる。実はその光平にとつて白鷗吟社は学問活動の母胎でもあつたのである。光平は志紀郡林村尊光寺の次男として生れたが、六歳のときから丹南郡野村の西願寺に一〇年間養われた。その間、最初に学んだ師が平田竹軒であつた。一六歳のとき西本願寺の学

寮に入って僧侶として修練を積むが、天保八年、二五歳のときいったん郷里河内に戻る。そのとき、その才を惜み、再び京に遊学するように勧めたのが、やはり平田氏であったという。土橋真吉『伴林光平』は平田竹軒とするが、竹軒はこの年すでに没しているので、おそらくその後を継いだ弟梅軒であろう。その京遊であらためて学ぼうとしたのは仏教より儒学であった。ちょうどそのころ、駒ヶ谷の篠置易庵が京に遊学しており、そのもとに赴かしたという。光平は易庵を介して川上儀左衛門（号東山）という古賀精里・頼山陽門下の学者について貧窮のなか、苦学する。仏教から儒学に新たな方向を見出そうとしたらしい。そしてそれが天保八年という大塩の乱の起こった年であったことは単なる偶然ではないかもしれない。

儒学を学ぶこと一年余り、その後は伊丹の中村良臣、因幡の飯田秀雄、和歌山の加納諸平から国学および和歌の指導をうけ、さらに天保一一（一八四〇）年には江戸へ下り、国学者伴信友に師事した。天保一二年光平が河内に帰郷して居とした所は、自身の学び育った所、すなわち野村の西願寺であったらしい。弘化元（一八四四）年ころの日記に「野村に帰宿す」と散見する。ただし近隣の向野に別宅があったようで「向野別業に帰る」とか「向野別業に書棚を移す」というような記事も多い。そうしてこの間、歌人・国学者として活動しながら、一方では「古市真蓮寺に会す」とか「道明寺植田氏詩会」とか「国分村柘（植）氏詩会」とか白鷗吟社の流れをくむ地域の学芸家たちと詩文の交流をも持続していた。その中には「終日白鷗会、別業に於て修行」（弘化二年二月二〇日）というような注意すべき記事もみえる。平田兄弟はこのときすでに没していたが、なお地域では活発な学芸交流が行われ、光平自身も、少年期の師平田兄弟の志をついで、「白鷗」の名を冠した講習会を向野の別業でもっていたのである。そしてこの間に『河内上古水土考』をはじめとする堅実な考証的著述も著された。

光平といえ、国学者・歌人そして天誅組参加者としての面のみが語られがちだが、このように、白鷗吟社の学芸の流れを一つの母胎としていたこともその学芸形成の条件として注意すべきであろう。逆にいえば白鷗吟社の作り出した学芸の流れは幕末期においてなお命脈を保ち、ある「志」を形成するものとして一つの展開を示したとも

いえよう。そしてさらに、それはもう一つの新たな形態をもった運動へと展開しつつあった。

## 5 柘植葛城と立教館と

柘植龍洲と葛城 さて、この白鷗吟社と関わりをもちながら新たな展開を示した人に安宿部郡国分（現柏原市）の医家柘植龍洲・葛城父子がいた。国分村は大和川沿いに位置し、古来より大坂・堺から大和へ至る街道の要所であるとともに大和川水運の中心でもあり、剣先船も大坂について三五艘を認可されていた商品流通の中継地であった。幕末期の人口は約二五〇〇人ほどを数え、かなり大きな在郷町であった。

柘植龍洲（明和七（一七七〇）年～文政三（一八二〇）年）は儒学を大坂懷徳堂の中井竹山に、医学を浅井凶南に学んだ人で、在郷町国分において医館先天堂を営む一方、高安郡恩智に折肱館を、大坂和泉町に鳳鳴館という分館をも営み、寛政一一年には大和高取藩の侍医ともなり、地域の学芸活動をリードした人であった。

この龍洲の子が柘植葛城である。やはり大坂懷徳堂の中井碩果に学び、その後文政二年から京の頼山陽に学んだ。山陽塾では長期にわたって相当親密に教えをうけたことが断片的に残される山陽批正の草稿や講義筆記類からうかがわれる。葛城は山陽塾で研鑽を積んだのち、文政一〇年、山陽の親友である京の医家小石元瑞に入門した。小石元瑞は上方に蘭学をもたらしした小石元俊の子、医塾究理堂を開いて、医療の傍ら医学教育に携わっていた。究理堂文庫には葛城の編集になる「究理堂備用製葉帳秘」が残されている。また元瑞口授の「究理堂備用方府記聞」には、父柘植龍洲の『温泉論』を高く評価して、「予カ門人ノ製葉帳秘ヲ輯メシ卓馬（葛城）ノ父」と語られ、元瑞自身も温泉論を著しつつあり「後日卓馬ニ校正サスル積リ」とも述べている。究理堂においても葛城は信頼される門下であった。なおその間も頼山陽との関係は持続しており、山陽は葛城が河内へ帰るに際して長編の送詩を詠んでおり、さらに婚姻の媒をもしようとした書簡が残される。



葛城は懷徳堂として頼山陽と小石元瑞という、おそらく当時最高の学者に学んだ。しかし、葛城は郷里国分の医業を継がねばならなかった。文政一三（一八三〇）年、二六歳のとき、国分へ帰り、今度は地域活動に力を傾注することとなる。しかしその際、彼に寂しい思いをさせたのは河内に学友が少ないことであった。帰郷当時の文章に「埜（野）村梅軒に与うる書」という文がある。そのなかで葛城は河内文運に思いをはせてつぎのようにいつている。

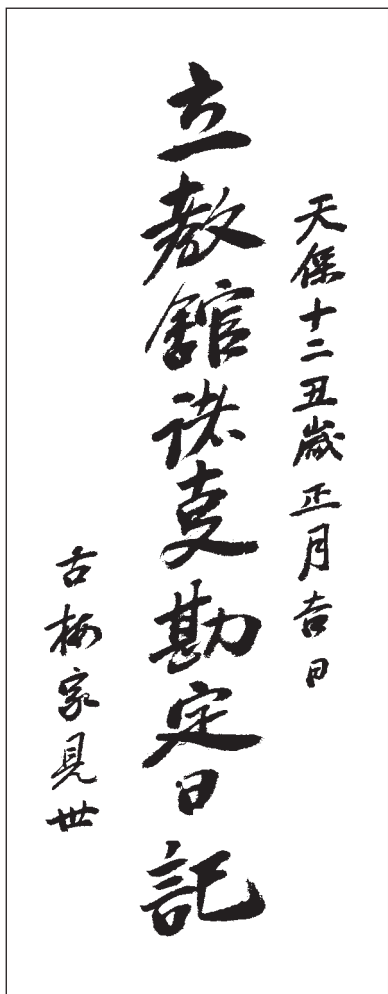
「昔、享保・寛政の間、碩儒ならび起ち、文学日に盛ん、握壽の人（博奕打）もまた書を夾み、冊を懐にして有徳の門に走る、しかるに我が河内や、僅々その餘声を蒙るのみ」（原漢文）と、河内の学芸文化的基盤の薄弱さを痛嘆する。博学高才の先生がいると聞き、訪ねてその出身を問えばみな他国である。「いまだかつて河内に某先生あるを聞かざるなり、邦人（河内の人々）これを渴望す」と。ところが、今春（文政一三年春）帰省して一友人から詩文数篇を見せられた。読んだところ「詞氣卓絶、意趣凡ならず」三読したという。その作者こそ白鷗吟社の平田梅軒その人であった。まだ面謁こそしていないが、その人となりを見ることができたという。しかも友人の話では梅軒は「才情秀逸」であるだけでなく、「慨然として常に吾邦（河内）学声の振るわざるを嘆ず」という人だという。葛城はこれ聞き、「僕、これを聞くに及んで、大いに喜び、覚えず、手をうって曰く、これ吾れ待つところの人なり、この人ありてこの機に会す」と喜び、「河内文化開けず、独りかくの如き者あり、あに天、この一邦を遺れんや。以て公（梅軒）の手を待ちてこれを興さんと欲するなり」と、ともに河内に新たな文化を興そうとよびかけたのである。

葛城は国分において医業に携わるとともに、業余、村中の子弟に儒学を教えはじめたところ、入門者が続々と集まったという。しかも教育活動に志をもつものは彼だけではなかった。西尾家（屋号米屋）の人々は、すでに白鷗吟社、そして篠崎小竹の梅花社に加わる人であった。そしてさきの書簡がきっかけとなったのであろう、白鷗吟社は国分に近い志紀郡国府の潮音禪寺でも月例会が催されることとなる。白鷗吟社は丹南郡野村のほかに柘植葛城を中心とする新たな拠点をもつようになるのである。さらに国分では、独自の活動の場を確保すべく、早くも文政



一三年一二月末、古市村江見氏の茶亭を金五両で買取って移築し、学芸活動の拠点を得ようとした。この買得の中心となったのは葛城と両西尾家の人々であった。その買得の相手が古市の江見氏、すなわち白鷗吟社に関わり、兼葭堂にも会いに行った医家江見氏であることは、この新たな動きが白鷗吟社の発展的継承であることを語っている。平田竹軒はすでに没し、梅軒もすでに高齢であった。すなわち白鷗吟社は柘植葛城を中心とする新たな教育活動へと受けつがれていったのである。

立教館の形成 大塩の乱ののち、天保一二（一八四一）年、社会的危機感の深まりと生徒の増加に伴う新たな教育的対応を意図して学舎が新築された。それが立教館である。立教館は柘植葛城を中心に「立教館社中」とよばれた地域の有志によって出資運営され、他の干渉からは自由に形成されたものである。「社中」に連なった人々は葛城の外は、西尾兵右衛門・同伊右衛門・竹腰権之助・堅山新七・乾専助・園田忠助・東野哲二郎という人々であった。多くは国分の村役人層である。しかし先にふれた西尾家の外、東野哲二郎のように懐徳堂で学んだ人もいる。龍



天保12年  
『立教館諸事勘定日記』（西尾家蔵）

洲・葛城父子もそうであったが、懷徳堂の教育運営方法が立教館の設立においてもモデルとされたのであろう。

のちに慶応四年二月作成の「国学所立教館規則書」はモデルプランであり必ずしも現実の教育内容を示しているとはいえないが、それによれば、八歳で入学し、一三歳で読業を修了し、一五歳でほぼ四書に通じ、二〇歳で六経を講じ、二五歳に至れば経書諸子百家にあまねく通ずるようになるのが学習課程の理想とされている。立教館は儒学教育を基本に「治世之才」を育成しようとする意図をもつ学校であった。

しかし立教館は次第に隆盛に向かうとともに学館が大破し、一端中絶のやむなきにいたる。このときの再興は社中自身の力ではなしえなかった。嘉永年間に入って時の代官設楽<sup>した</sup>八三郎の助力を得て再興されることとなる。この設楽氏もまた懷徳堂の並河寒泉の教えをうけた人であることは興味深い。

立教館は再興されてのち、講習は間断なく行われるようになり、生徒も増加して講舎の狭隘化を招くにいたった。文久三（一八六三）年再び新造計画が出され、そのための寄付が募られた。その結果、金銀のほか材木・手伝人足など計四七件の寄付がなされている。金銀の寄付のほとんどは立教館社中によるものであるが、国分村を中心に隣七カ村から材木等の寄付がなされ、村中各町から二〇人〜一五四人までの計七件の手伝人足の申し出があり、立教館が地域に根付いた教育施設となっていたことをうかがわせる。なお、同時期の願書一通には「普請金は学校手近の村々、尚又白鷗社中、和州近界村々それぞれ有志輩へ頼<sup>たの</sup>母子あい企て、右にてあい賄い候事」という一条がみえ、立教館が村々有志のほか、「白鷗社中」を支持母胎としていたことが、この期においても確かめられる。

学芸運動の継承 維新後、村では立教館を新政府の行う教育機関の一つとして認められるように嘆願し、はじめは「国学所立教館」となることを願い出たが、明治四年、学制発布に先立って小学校として取り立てられるようお願い、堺県に「献納」されてのち、明治七年からは「二十五番小学」（国分小学校）として新たな出発をすることになる。生徒数は国分村一五八人をはじめ一〇カ所から計二一三名であった。

立教館は、はじめ柘植葛城を中心として、白鷗吟社を発展的に継承し、村内有志が結んで行われた儒学講習グル

ープであったが、天保期の社会情勢のなかで新たに学館建設を行い、自主的運営によって積極的な地域住民に対する教育運動を展開しようとした。しかしおそらく経営難による衰退を招き、嘉永期、代官設楽氏の援助による再興を経ながらも、なお地域住民の支持をえて、自主的教育施設としての性格を維持しつつ近代的施設への移行を果たそうとしたものであったといえよう。こうして、一八世紀後半に形成された学芸結社の水脈は、その形態を変えながらも、広がりをもつて、その水流を維持し、地域文化の底流として近代にも受け継がれたのである。含翠堂、懷徳堂、混沌社という上方に独自に形成された新たな学芸教育運動の形態を継受しながら、白鷗吟社、そして立教館は、まさに地域で生きることを通して、またそこで学びあうことを通して社会や国家の問題を考えていく場にしていくこうという意志が具体的に発揮された結びつきと交流の場であったと思われる。

〔付記〕本書は旧稿の一部に補訂を加え再編成してまとめたものである。その主要なものは「河内在郷町の文化」〔『関西の文化と歴史』松籟社〕、『富田林市史』第四卷、「在村学芸結社の形成と展開」〔『近世近代の地域と権力』所収、清文堂〕である。